

羽沢具行遺跡・羽沢大丸遺跡発掘調査報告

—都市計画道路羽沢池辺線（羽沢・菅田地区）街路整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書—

2008

横 浜 市 道 路 局
財団法人横浜市ふるさと歴史財団

例 言

- 1 本書は、横浜市道路局が横浜市ふるさと歴史財団に委託し、都市計画道路羽沢池辺線（羽沢・菅田地区）埋蔵文化財本発掘調査業務委託として平成19年4月16日～同年7月31日に実施した都市計画道路羽沢池辺線（羽沢・菅田地区）街路整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書である。
- 2 資料整理及び報告事業は、横浜市道路局が横浜市ふるさと歴史財団に委託し、都市計画道路羽沢池辺線（羽沢・菅田地区）埋蔵文化財整理報告業務委託として平成19年10月31日より平成20年1月31日まで実施し、その事業成果物が本報告書である。
- 3 本書の遺構・遺物挿図の指示は下記の通りである。

[挿図縮尺]

遺 構 土坑 1：40 炉穴 1：40 ピット群 1：150

遺 物 土器拓影 1：2

[遺構挿図]

◎挿図中の方位はすべて真北を示す。

◎水系レベルは標高を示す。水系レベルは標高を示す。

◎ピット群等のピットの深さは、周辺の遺構確認面からの換算値として図中に表記した。

◎遺構内・その他、特徴のある部分についてはトーンを用いて表現した。

[遺物挿図]

◎出土遺物番号は3桁の数字をもって表わし、その頭に土器類をあらわすPを付した。

- 4 本文中に記載している遺構の記述のなかで、（ ）付きの数値については、現存する大きさを表わしている。
- 5 本文中に記載している遺構の記述のなかで、（ ）付きの数値については、復原推定径ないしは、現存する大きさを表わしている。また、土器の色調に関する記述の中で用いられている（ ）付きのものは、土器の内面の色調を呈している。
- 6 遺物の整理および図版の作成作業は埋蔵文化財センターにおいて鹿島・橋本が行ない、執筆・編集作業は鹿島が中心に行なった。
- 8 遺物の写真撮影は、鹿島が行なった。
- 9 調査組織

調査担当 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 理事長 高村 直助

埋蔵文化財センター所長 鈴木 重信

調査研究係長 鈴木 重信 調査研究係 鹿島 保宏・橋本 昌幸

調査協力者

[発掘調査] 唐沢 泰・西野 郁子・細野 貴志・山本 裕志

[遺物整理] 荒井 サチ子・唐沢 泰・栗原 江美子・越 喜久子・西野 郁子・長谷川 孝子・

細野 貴志・山本 裕志

- 10 本遺跡の出土品、記録図面および写真等は財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 11 発掘調査および出土品の整理作業に際しては、次の諸氏・諸機関にご助言・ご協力を賜った。ここに芳名を記し、深謝の意を表します。

発掘調査

横浜市神奈川区神奈川土木事務所・株式会社コタケ土木・株式会社横浜技術コンサルタント

目 次

例言	i
目次	iii
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査経過	3
第3章 発見された遺構と遺物	5
(1) 基本層序	5
(2) 羽沢具行遺跡	5
土坑	6
炉穴	14
ピット群	18
遺構外出土遺物	23
(3) 羽沢大丸遺跡	24
炉穴	24
ピット群	26
第4章 まとめ	29
用語解説	30
写真	31
羽沢具行遺跡	32
羽沢大丸遺跡	35
抄録	37

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	1	第18図	2号炉穴	15
第2図	遺跡の位置相関図	3	第19図	3号炉穴	16
第3図	土層模式図	5	第20図	4号炉穴	17
第4図	羽沢具行遺跡遺構分布図	6	第21図	5号炉穴	17
第5図	1号土坑	7	第22図	6号炉穴	18
第6図	2号土坑	7	第23図	ピット群1	19
第7図	3号土坑	8	第24図	ピット群2	20
第8図	4号土坑	8	第25図	ピット群3	21
第9図	5号土坑	9	第26図	ピット群4	22
第10図	6号土坑	10	第27図	遺構外出土遺物	23
第11図	7号土坑	11	第28図	羽沢大丸遺跡遺構分布図	24
第12図	8号土坑	11	第29図	1号土坑	24
第13図	9号土坑	12	第30図	2号土坑	25
第14図	10号土坑	13	第31図	3号土坑	26
第15図	11号土坑	14	第32図	ピット群出土遺物	26
第16図	12号土坑	14	第33図	ピット群1	27
第17図	1号炉穴	15	第34図	ピット群2	28

写真目次

扉写真	遺構精査風景	31	写真17	2号炉穴	34
写真1	羽沢具行遺跡遠景	32	写真18	3号炉穴	34
写真2	調査前風景	32	写真19	4号炉穴	34
写真3	調査区設定作業風景	32	写真20	5号炉穴	34
写真4	1号土坑	32	写真21	6号炉穴	34
写真5	2号土坑	32	写真22	北側調査区調査終了後風景	34
写真6	3号土坑	32	写真23	調査終了後全景	34
写真7	4号土坑	32	写真24	調査終了後全景	34
写真8	5号土坑	32	写真25	羽沢大丸遺跡遠景	35
写真9	6号土坑	33	写真26	調査前風景	35
写真10	7号土坑	33	写真27	表土除去作業風景	35
写真11	8号土坑	33	写真28	1号土坑	35
写真12	9号土坑	33	写真29	2号土坑	35
写真13	10号土坑	33	写真30	3号土坑	35
写真14	11号土坑	33	写真31	調査終了後全景	35
写真15	12号土坑	33	写真32	調査終了後全景	35
写真16	1号炉穴	33	写真33	出土遺物	36

第1章 遺跡の位置と環境

本遺跡は、横浜市東部域にあたる神奈川区羽沢町に位置し、それぞれの遺跡が位置する地番は、羽沢具行遺跡が羽沢町658番地ほか、羽沢大丸遺跡が羽沢町365番地ほかで、神奈川県遺跡番号は、羽沢具行遺跡が神奈川区No22、羽沢大丸遺跡が神奈川区No24となっている。

この辺りは、東京湾にそそぐ鶴見川と帷子川の2つの河川に挟まれた南東方向に標高50~80mほどの丘陵が南延びている。また、この丘陵の東側部分には、鶴見川の支流のひとつである鳥山川が東流しており、同河川によって開析された狭い沖積地が入り込んでいる。

遺跡はこの沖積地の最奥部にあたる谷を挟んだ両側に位置している。2つの遺跡のうち、北側に位置するのが羽沢具行遺跡で、南側に位置するのが羽沢大丸遺跡である（第1・2図参照）。またこの辺りの地形は、西側の帷子川に面した急峻な地形を呈しているのに対し、東側の鳥山川側では緩やかな起伏を呈しているのが特徴的であるが、2つの遺跡は鳥山川側に面しているため、比較的緩やかな斜面をもつ丘陵上に位置している。

周辺にはいくつかの遺跡が存在している。このなかで発掘調査が実施された著名な遺跡をあげる。



- | | | | |
|----------------|-------------|--------------|--------------|
| 1 羽沢具行遺跡 | 2 羽沢大丸遺跡 | 3 菅田中学校敷地内遺跡 | 4 県営片倉町団地内遺跡 |
| 5 供養塔貝塚 | 6 県営羽沢団地内遺跡 | 7 県営羽沢東団地内遺跡 | 8 平尾台貝塚 |
| 9 天屋遺跡 | 10 長山貝塚 | 11 片倉町遺跡 | 12 南原遺跡 |
| 13 常盤台遺跡（帷子貝塚） | 14 釜台町上星川遺跡 | 15 釜台古墳 | |

第1図 周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

2 遺跡の南東約 1 km に位置する常盤台遺跡がある。この遺跡は、現在の横浜国立大学の敷地内に位置しており、帷子貝塚（保土ヶ谷貝塚）などとも呼ばれている。数度の発掘調査で縄文時代早期の陥し穴をはじめ、縄文時代の遺物包含層などが調査されている。また、南約 1.3 km には釜台町上星川遺跡と釜台古墳がある。釜台町上星川遺跡は弥生時代後期の集落跡で、朝光寺原式と呼ばれる横浜市北部域で見られる特徴的な土器形式を出土した竪穴住居跡が調査されている。釜台古墳は、径 9 m、高さ 6 m ほどの円墳で、主体部は確認されなかったが埴や坏などの遺物が確認されている。現在では JR 東海の東海道新幹線によって分断されているが、羽沢具行遺跡と同じ丘陵上の北側では、供養等貝塚、菅田中学校敷地内遺跡（縄文時代竪穴住居跡 1 軒、土坑 3 基調査）などのほか、羽沢大道遺跡（県立羽沢団地内遺跡）や県営羽沢東団地内遺跡が知られている。羽沢大道遺跡では、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡が 18 軒調査されたほか、200 基近い土坑が調査されている。このうち縄文時代早期の土坑（陥し穴）は 78 基を数えている。また、県営羽沢東団地内遺跡は縄文時代早期の陥し穴 12 基、陥し穴以外の土坑 11 基および炉穴 21 基等が調査されている。

さらにこれらの遺跡の北西には平尾台貝塚（平台北遺跡群）、県営片倉町団地内遺跡がある。平尾台貝塚の一部は平台北遺跡群として調査されており、5 地点が調査され、縄文時代の竪穴住居跡 2 軒（中期・後期）と土坑 1 基が確認されている。また、県営片倉町団地内遺跡では、縄文時代早期の陥し穴 26 基、炉穴 1 基、前期の竪穴住居跡 2 軒などが調査されている。

羽沢具行遺跡の東 1 km には天屋遺跡がある。天屋遺跡では縄文時代早期の土坑 10 基、焼土跡 1 か所、縄文時代中期末～後期初頭にかけての竪穴住居跡 1 軒が調査されている。さらに東には片倉町遺跡（片倉台遺跡）があり、この遺跡では縄文時代早期の炉穴や土坑が調査されているが、その内容については詳らかではない。

また、帷子川を超えた対岸の台地上には、3 度調査が行なわれ縄文時代中期の集落跡であることが判明した南原遺跡が知られている。

【参考文献】

- | | | |
|------------------------|------|---------------------------------|
| 石野 瑛 | 1963 | 「神奈川県横浜市釜台古墳」『日本考古学年報10』日本考古学協会 |
| 横浜市教育委員会 | 1984 | 『昭和58年度文化財年報（埋蔵文化財その2）』 |
| 玉川文化財研究所 | 1984 | 『平台北遺跡群発掘調査報告書』 |
| 相武考古学研究所 | 1985 | 『釜台町上星川遺跡』相武考古学研究所調査報告第 1 集 |
| 横浜市教育委員会 | 1998 | 『平成 8 年度文化財年報（埋蔵文化財その15）』 |
| 神奈川県立埋蔵文化財センター | 1990 | 『天屋遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告22 |
| 県営片倉町団地内遺跡発掘調査団 | 1992 | 『県営片倉町団地内遺跡』 |
| 横浜市道路局・財団法人横浜市ふるさと歴史財団 | 2002 | 『南原遺跡発掘調査報告』 |
| 県営南原団地内遺跡発掘調査団 | 2002 | 『南原遺跡発掘調査報告書』 |
| 財団法人かながわ考古学財団 | 2002 | 『南原遺跡』かながわ考古学財団調査報告129 |
| 横浜市教育委員会 | 2004 | 『横浜市文化財地図』 |

第2章 調査経過

調査にあたっては、2つの遺跡に対して調査用のグリッドを設定することからとり行なった。

一旦は、2つの遺跡とも同一のグリッドを使用して調査を行なうことも考えたが、2つの遺跡の占地する地形の関係などから、やはり調査に際しては、別のグリッドを使用した方が作業効率が良いと判断し、別々のグリッドを組むこととした。

まず、羽沢具行遺跡では、計画道路のセンター杭のNo15+00 (X=-57383.9433、Y=-22654.4783、JGD2000) とNo16+00 (X=-57364.0905、Y=-22656.9706、JGD2000) の2本の杭を用いることとした。この2つの杭を結ぶラインとそれに直交するラインを引き、調査区全体を網羅すべく8mのメッシュをかけた。このメッシュの北西方向の角を基準とし、東西方向にはアルファベット、南北方向には数字を冠した。また、この8mグリッドをさらに2mのグリッドに細分し、東西方向には小文字のアルファベット、南北方向には数字を冠しグリッドの呼称とした。その結果、No15+00の調査用名称はD-7-a3杭、No16+00調査用名称はD-5-a1杭となっている(第2・4図参照)。

続いて羽沢大丸遺跡では、横浜市の境界杭C-19L1杭 (X=57750.3403、Y=22686.3206、JGD2000)、C-19L杭 (X=57750.5693、Y=22673.8286、JGD2000) の2本の杭を用いることとした。こちらの遺跡では、C-19L1杭からとC-19Lへと延ばした結ぶ仮想線から1°北へ振ったラインをベースラインとし、このラインより4m北に上がったラインと、それに直交するラインを用いて調査区全体を網羅すべく8mのメッシュをかけた。羽沢具行遺跡と同様に、出来上がったメッシュの北西方向の角を基準とし、東西方向にはアルファベット、南北方向には数字を冠した。また、この8mグリッドをさらに2mのグリッドに細分し、東西方向には小文字のアルファベット、南北方向には数字を冠しグリッドの呼称とした。その結果、C-19L1の調査用名称はG-5-a3杭となっている(第2・28図参照)。

現地調査は平成19年5月14日より開始した。現地では、まず調査区の範囲を示す杭並びに、先ほどの調査用のメッシュに使用する基準杭の逃げとなる杭の設定を行なった。

また、調査範囲については、仮設道路の設置などの現地での状況によって計画上の範囲を変更しなければならない状況が生じた。特に



第2図 遺跡の位置相関図 (縮尺1/5,000)

羽沢大丸遺跡においては、計画当初は2つの調査区を設ける予定であったが、仮設道路によって減となった調査面積を確保するためには、2つの調査区の間へ振り替えるしかなかった。そのため、2つの調査区は非常に接近してしまい、排土の関係上、2つの調査区間に未掘部分を残して掘削することは非常に難しく、また、時間のロスを避けるためにも1つの調査区に接合することとした。この結果、羽沢大丸遺跡の調査面積は829㎡となった。

表土除去作業は5月16日から開始した。通常の調査では、表土除去を行なった後に遺構調査へと取りかかるのが普通であるが、今回の調査では重機の回送回数や時間のロス等を考慮して、2つの遺跡の表土除去作業を連続して行ない、遺構確認を終えてから各遺跡の遺構調査に入ることとした。具体的には、羽沢大丸遺跡の表土除去、羽沢具行遺跡の表土除去～遺構調査、羽沢大丸遺跡の遺構調査を行なうこととした。

表土除去作業は5月16日から開始した。羽沢大丸遺跡から行ない、22日に終了した後、引き続き羽沢具行遺跡の表土除去を行なった。羽沢具行遺跡では、当初計画では調査により生じた発生土を隣接する道路用地に仮置きすることを予定していた。しかし、このエリアと調査区間に存在する道路を確保しなければならないこと、また、排土にかかる時間の問題等を考慮した結果、北側に突出した調査区部分を先行して調査し、終了後直ちに埋戻しを行ない、その範囲に南側調査区で発生した発生土を仮置くことが最良の方法であるとの結論に至り、調査方法を変更することとなった。

表土除去は23日より開始し、この部分の表土除去は24日で終了した。また、表土除去作業の期間を短縮するため、北側の調査区の遺構調査を行ないながら、南側調査区の表土除去作業を併行して実施することとした。

北側の遺構調査は29日に終了した。横浜市教育委員会（文化財課）職員による終了立ち会いを経た後、突出部分の埋戻しを開始し、残余の表土除去作業および遺構調査に取りかかった。また、遺構調査は表土除去作業の関係もあって、東南方向より順次行なうこととした。遺構調査は6月6日の12号土坑の調査をもって終了した後、全体撮影のための清掃に取りかかり、翌7日、全体写真撮影および地形測量をもってすべてを終了した。羽沢具行遺跡の調査面積は1,791㎡となった。

また、同日より羽沢大丸遺跡の遺構調査に取りかかった。しかし、長い期間表土を除去したままの状態であった調査区は著しく乾燥していた。遺構確認図は作成していたものの、遺構の形状も不明瞭であったため、まずはジョレンによる全体精査を行ない遺構の再確認を行なうこととした。この作業の翌日より遺構調査を実施し、6月13日の3号土坑並びに全体写真撮影をもって掘削調査を終了した。

同日、横浜市教育委員会（文化財課）職員ならびに財団法人横浜市ふるさと歴史財団の各職員により、羽沢大丸遺跡、羽沢具行遺跡の2遺跡の現地調査終了の立ち会いを行なった。その後、地形測量等の補助作業を6月19日まで行ない、終了後埋戻し作業を行なった。

遺物整理報告作業は同年10月31日から実施し、本報告書の刊行をもって羽沢具行遺跡並びに羽沢大丸遺跡の両遺跡にかかる一連の事業を完了した。

第3章 発見された遺構と遺物

(1) 基本層序

羽沢具行遺跡と羽沢大丸遺跡の2つの遺跡は、現在環状2号線道路が走っている谷を挟んだ両側に位置し、僅かに直線距離で400mほどの距離しか離れていない。このため、2つの遺跡を覆っていた堆積土については、さほど変化は認められなかった。そのような状況から、遺跡の標準堆積層も1つのものとして取り扱うこととした。

2つの遺跡において大きく異なる点は、遺跡を覆っている最上層の状態であった。羽沢大丸遺跡の地点の一部（調査区の北側1/3～1/2）では、調査に入るまで産廃土の仮置き場となっていた。この産廃土は表土の上面に積みおいただけでなく、表土を掘削した後に積み上げていた。また、一部ではその掘り込みは地山にまで達していた。

この部分を除くと2遺跡の堆積土は非常に似通っている。表土はいずれも厚く開墾され、その下方の一部では宝永火山灰が混在していた。ただし、この宝永火山灰は層として認識できるほどではなかった。

また、開墾が深くまで達していた関係から、通常確認される弥生時代以降の遺物包含層（Ⅱ層）も明瞭な堆積としては捉えることができなかった。

縄文時代の遺物包含層は羽沢具行遺跡では薄く、羽沢大丸遺跡では厚かったが、これは、遺跡が占地している丘陵の状況からである（羽沢大丸遺跡は谷部にあたっている）。また、両遺跡ともにソフトロームの層厚が薄いことが特徴としてあげられる。これは、縄文時代遺物包含層が堆積する以前に、ソフトロームの一部が流れ落ちてしまったものと考えられる。

I層：表土。耕作土及び産廃土。下位では江戸時代まで遡る可能性を有している。

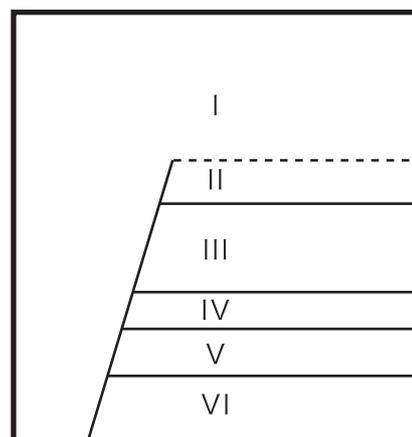
Ⅱ層：黒褐色土。耕作により著しく乱され、顕著な堆積は確認できなかった。いわゆる弥生時代以降遺物包含層。

Ⅲ層：暗褐色土。一部では、色調が明るいものと暗いものに分別できたが、概ね1層となる。小径の赤色スコリア粒の混入が見られる。いわゆる縄文時代遺物包含層。

Ⅳ層：明褐色土。ローム漸移層。

Ⅴ層：褐色土。いわゆるソフトローム（以下立川ローム層）。

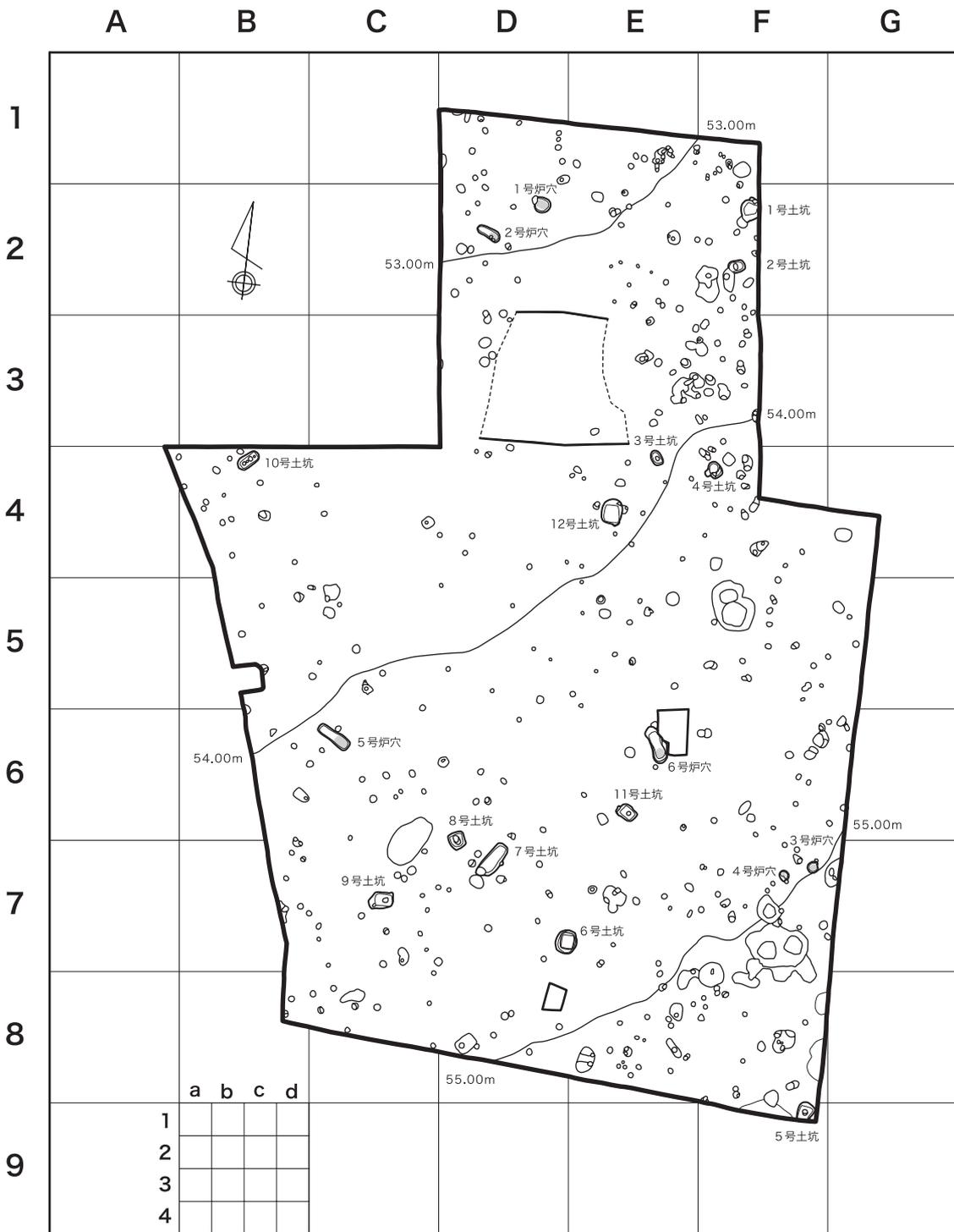
Ⅵ層：褐色土。いわゆるハードローム



第3図 土層模式図

(2) 羽沢具行遺跡

今回の羽沢具行遺跡で検出された遺構は、縄文時代早期の土坑12基、炉穴6基、時期を特定できないピット群（倒木跡を含む）である。以下に検出された遺構の記述を記載する。



第4図 羽沢具行遺跡遺構分布図（縮尺1/400）

土坑

・1号土坑（第5図）

本遺構は調査区の北東、調査区境のF-2-b1~b2グリッドに位置し、その東側の一部を調査区外へと延ばしている。遺構確認面はIV層で、上面の一部を失っていたものの遺存状態はさほど悪くはない。

開口部で1.33×1.25m、坑底で0.74×0.91mを測り、検出部での平面形状は、開口部、坑底ともに方

形気味の不整形となっている。現存する掘り込みは0.40mとやや浅めである。土坑の長軸はW-53°-Nに向けている。

周壁は北側が垂直に近いもののやや緩やかに掘り込まれ、あまり凹凸は有しておらず、緩やかに坑底へと移行している。

坑底はVI層中に構築される。若干中央に向かい傾斜しているもののほぼ平坦かつ堅緻である。坑底には何ら施設は確認されていない。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、周壁から坑底にかけて、周壁の崩落土と考えられるロームを多含する層が確認されたが、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

出土遺物は皆無であった。

・ 2号土坑 (第6図)

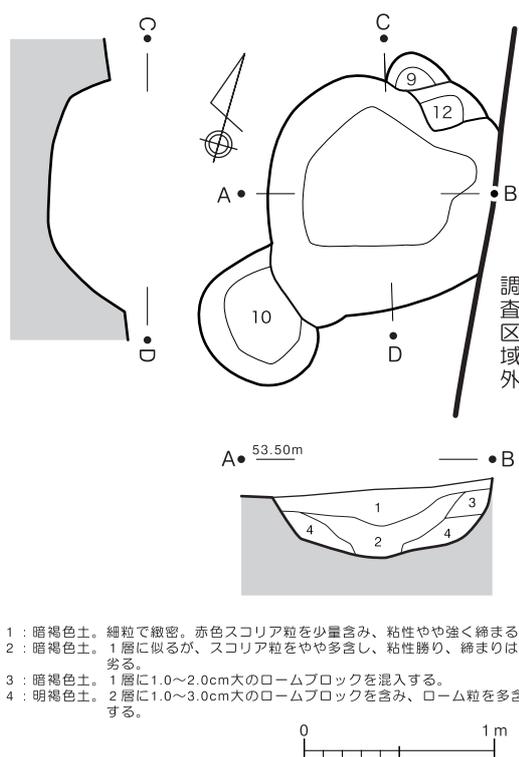
本遺構は調査区の北東寄り、1号土坑の南側のF-2-a3~b3グリッドに位置し、IV層中にて確認された遺構である。検出時には上面の大半が失われるほか、南側でピット状の落ち込みと重複するなど遺存状態は非常に悪い。

開口部で1.04×0.74m、坑底で0.86×0.57mを測り、現存する部分での平面形状は、開口部、坑底ともに楕円形を呈している。現存する掘り込みは0.10mと非常に浅く、土坑の長軸方向はN-76°-Eに向けている。

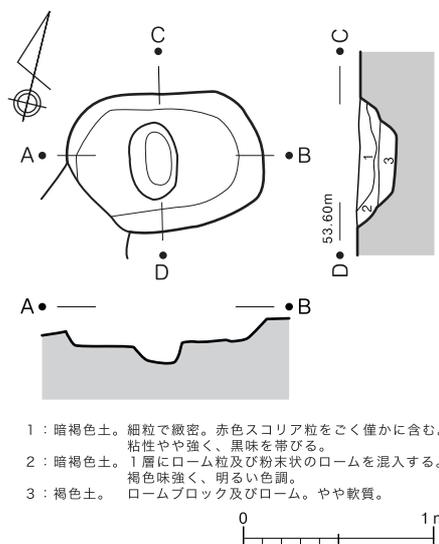
周壁は開き気味に立ち上がっており、坑底との境目ややは緩やかではあるが、1号土坑に比べると明瞭である。また、周壁の状態については、残存部分では凹凸は認められない。

坑底はV層上面に構築される。さほど堅緻ではないが平坦に設えている。坑底の中央から若干西側に寄った場所に径25×40cm程の平面形状が楕円形を呈する坑底施設を有している。坑底からの深度は9cmと浅く、逆茂木穴として機能していたものとは考えづらい。また、坑底施設の長軸方向は、土坑の短軸方向を向いている。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、坑底施設内にはロームブロック主体土が確認されたが、人為的に埋め戻されたようではなく、上面も堅緻ではなく、いずれも自然堆積の様相を呈していた。また、ピット状の落ち込みとの新旧関係については、重複部分が僅かであったことと、堆積土の違いを肉眼では観察できなかったことから確認することは



第5図 1号土坑



第6図 2号土坑

きなかった。

出土遺物は皆無であった。

・ 3号土坑（第7図）

本遺構は調査区の北東寄り4号土坑の西側のE-4-c1グリッドに位置し、IV層中にて確認された遺構である。検出時には上面の大半が失われ遺存状態は非常に悪い。

開口部で0.95×0.55m、坑底で0.71×0.45mを測り、平面形状は開口部、坑底ともに不整楕円形を呈している。現存する掘り込みは0.14mと非常に浅く、土坑の長軸方向はW-36°-Nに向いている。

周壁は北側を除き開き気味に立ち上がっており、緩やかに坑底へと移行している。周壁の状態については、残存部分では凹凸は認められない。

坑底はV層中に構築される。さほど堅緻ではないが平坦に設えている。坑底の中央から若干南側に寄った場所に径29×21cm程の平面形状が楕円形気味を呈する坑底施設を有している。坑底からの深度は6cmと浅く、逆茂木穴として機能していたものとは考えづらい。また、坑底施設の長軸方向は、土坑の長軸方向を向いている。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、坑底施設内にはロームブロック主体土が確認されたが、人為的に埋め戻されたようではなく、上面も堅緻ではなく、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

出土遺物は皆無である。

・ 4号土坑（第8図）

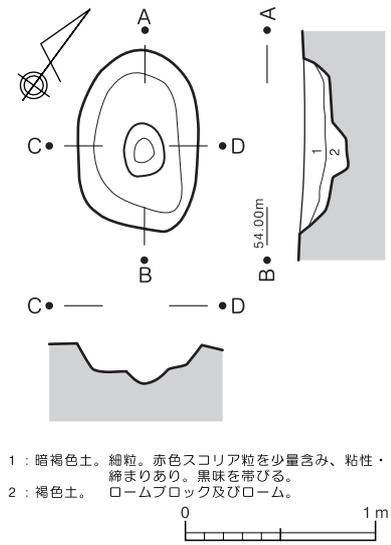
本遺構は調査区の北東寄り、3号土坑の東側のF-4-a1グリッドに位置し、IV層中にて確認された遺構である。検出時には上面の大半が失われているほか、南西部分でピット状の掘り込みと重複しているため、遺存状態は非常に悪い。

開口部で1.01×0.80m、坑底で0.78×0.63mを測り、平面形状は開口部、坑底ともに不整形を呈している。現存する掘り込みは0.21mと非常に浅く、土坑の長軸方向はW-41°-Nに向いている。

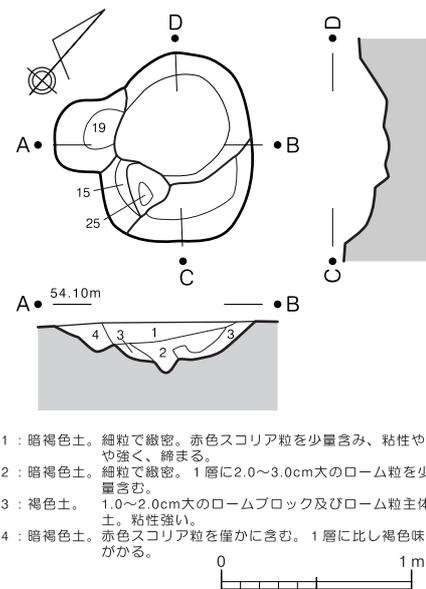
周壁はいずれもきわめて緩やかに掘り込まれており、坑底との境目は非常に分かりづらくなっている。

坑底はV層中に構築される。周壁ともにやや凹凸を呈しており、また堅緻とは言いがたい。坑底に施設は確認されていない。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、ロームブロック主体土が確認されたが、人為的に埋め戻されたようではなく、いずれも自然堆積の様相を呈していた。本遺構は、他の土坑以外の大きめの掘



第7図 3号土坑



第8図 4号土坑

り込みに比べ、堆積土がしっかりしていたため土坑として調査を行なったが、遺存状態がきわめて悪く、その他の土坑のように明確に土坑であるとは言いがたい遺構であった。

出土遺物は皆無である。

・ 5号土坑（第9図）

本遺構は調査区の南東、調査区境のF-8~9-d4~d1グリッドに位置し、その南側の一部を調査区外へと延ばしている。IV層中にて確認され、隣接してに倒木跡があるものの、遺存状態は非常に良好であった。

開口部で1.18×1.00m、坑底で0.94×0.57mを測り、平面形状は開口部、坑底ともに不整の台形を呈している。現存する掘り込みは0.84mと深く、土坑の長軸方向はN-17°-Eに向いている。

周壁はほぼ垂直に掘り込まれており、坑底より40cm付近より上で若干外側へと開いている。また、坑底との境目は非常に明瞭で、周壁の遺存状態は、凹凸を呈しておらず、堅緻で良好であった。

坑底はVI層中に構築される。ほぼ平坦に設えられた坑底は、周壁ともに非常に堅緻で、ほぼ中央部分に平面形状円形の径35×32cm、坑底からの深さ38cmを測る坑底施設を有している。この坑底施設は、2つの穴が重複した様相を呈している。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、ロームブロックを多含とする層とに大別されたが、いずれも自然堆積層の様相を呈していた。また、坑底施設内にはロームブロック主体土が確認されたが、こちらは人為的に埋め戻された様相を呈しており、坑底施設の上面は堅緻に設えられていた。

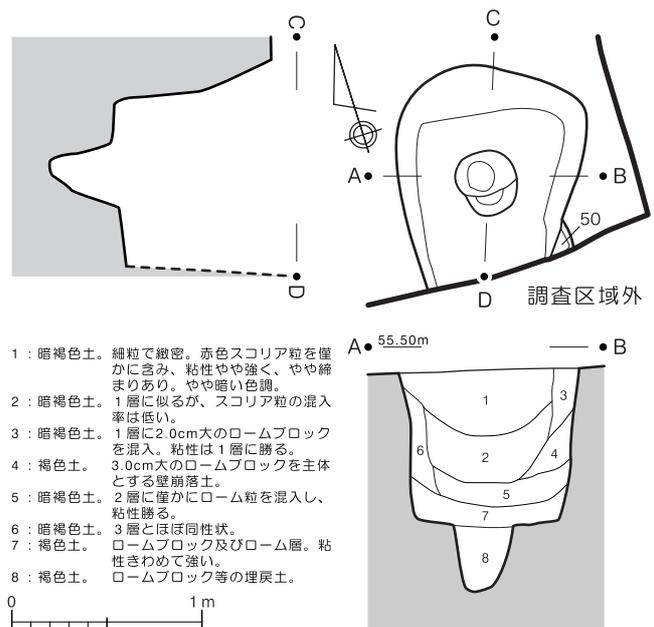
出土遺物は皆無である。

本遺構の東側には、確認面から50cmを測る掘り込みが確認されている。また、この掘り込み下面の坑底の一部に稜が認められた。この掘り込みは、底面施設の重複状況や、遺構確認面での平面形状の不自然さとあわせてみると、2つの土坑が重複して存在していた可能性も考えられる。しかし、土層の重複部分が僅かであったことから確認できなかったため、1基の土坑として捉えることにとどめた。

・ 6号土坑（第10図）

本遺構は調査区の南寄り、D~E-7-d3~a4グリッドに位置し、IV層中にて確認された遺構である。

開口部で1.45×1.30m、坑底で0.80×0.74mを測り、平面形状は開口部で楕円形、坑底では台形気味の隅丸方形を呈している。現存する掘り込みは1.75mと非常に深く、土坑の長軸方向はN-2°-Eに



第9図 5号土坑

向けている。

周壁は、坑底から約5cm付近までは垂直に近く立ち上がり、それより上方で一旦外側に大きく袋状に膨らみ、坑底から110cm付近で内側に迫り出した後にやや角度を持って開き気味に立ち上がっている。やや凹凸が認められるものの、全体的に非常に堅緻で、周壁の一部には足掛け穴とも考えられる小穴やステップ状の平場も有している。

坑底はⅥ層中に構築される。平坦かつ非常に堅緻で、僅かに北東方向へと傾斜している。坑底には施設は確認できなかった。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、ロームブロックを多含とする層とに大別された。また、13層の上面は非常に堅緻で、調査時には一旦この面が底面であると勘違いしたほどであった。僅かにこの面の一部に異質の堆積土を確認したため、掘削を行なったところ、埋戻し土であったことが確認された。2ないし3層の黒味の強い暗褐色土を間層とし、ハードロームブロック及びロームにを主体とするもので硬く埋め戻していたが、この部分についての土層堆積については作図できなかった。

出土遺物は、堆積土中より焼礫2個と台石のような大型の石

1個が確認されたが、いずれも人為的な加工は施されておらず、出土遺物としては処理していない。

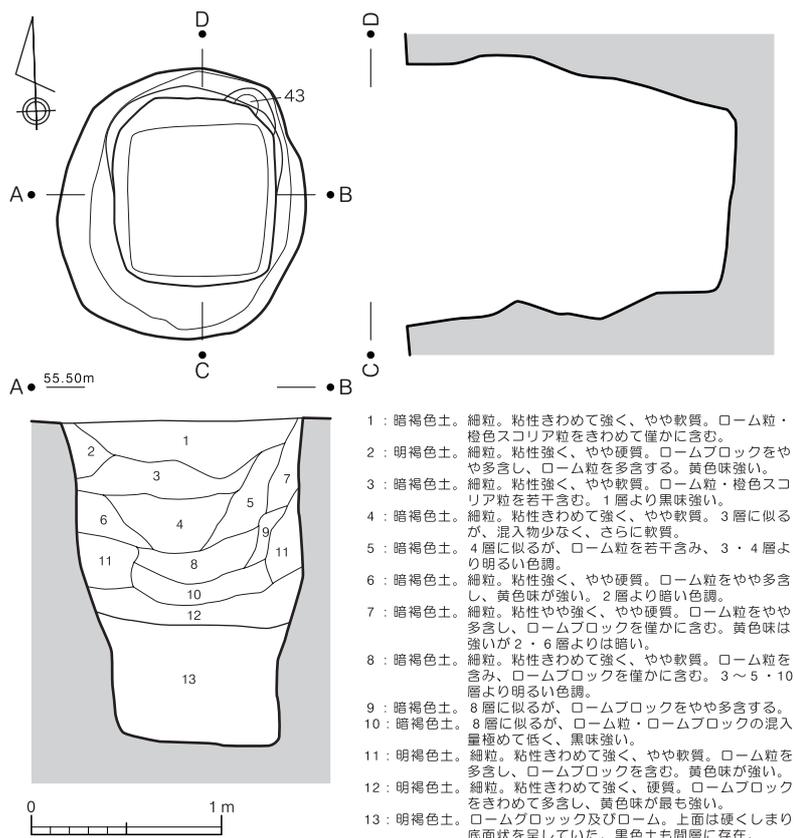
・7号土坑（第11図）

本遺構は調査区の中央やや南寄りのD-7-b1~c1グリッド、8号土坑の南東に位置し、南西および北東側でピットと重複している。Ⅳ層下面にて確認された遺構である。

開口部で2.22×1.02m、坑底で2.00×0.76mを測り、平面形状は開口部、坑底ともに隅丸の長細い長方形を呈している。現存する掘り込みは、0.22mと浅めである。土坑の長軸方向はN-34°-Eに向いている。

周壁は、やや角度をもって掘り込まれ、緩やかに坑底へと移行している。さほど凹凸は見られず、比較的堅緻な造りとなっている。

坑底はⅥ層中に構築される。坑底の状況は、周壁同様あまり凹凸は見られずほぼ平坦で、僅かに北東



第10図 6号土坑

方向へと傾斜している。坑底には施設は確認できなかった。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、下層にはロームブロックなどの混入が認められた。いずれも自然堆積の様相を呈していた。

出土遺物は皆無である。

重複するピットとの新旧関係は、堆積土の違いがほとんどないことから、さほど時期差がなく構築されたものと考えられるが、明確な差異を見つけることができず不明である。また、1～12号の他の土坑の形状と大きく異なっており、あるいは炉穴であった可能性も捨てきれないが、坑底や堆積土中に被熱した部分や焼土が確認できず、土坑として処理を行なった。

・ 8号土坑 (第12図)

本遺構は調査区の中央やや南寄りのD-6～7-a4～a1グリッド、7号土坑の北西に位置している。Ⅳ層中にて確認された遺構である。

開口部で1.03×1.00m、坑底で0.79×0.80mを測り、平面形状は開口部、坑底ともにやや不整な隅丸方形を呈している。

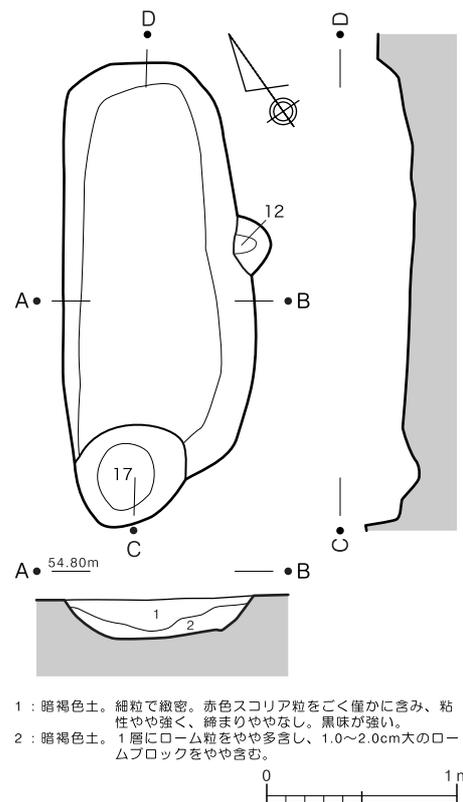
現存する掘り込みは0.34mを測り、土坑の一辺(軸)をW-32°-Nに向けている。

周壁は、西側がかなり垂直に近い角度で掘り込まれているのに対し、その他はやや角度をもって掘り込まれている。緩やかに坑底へと移行しており、周壁の状態はさほど凹凸は見られず、比較的堅緻で良好である。

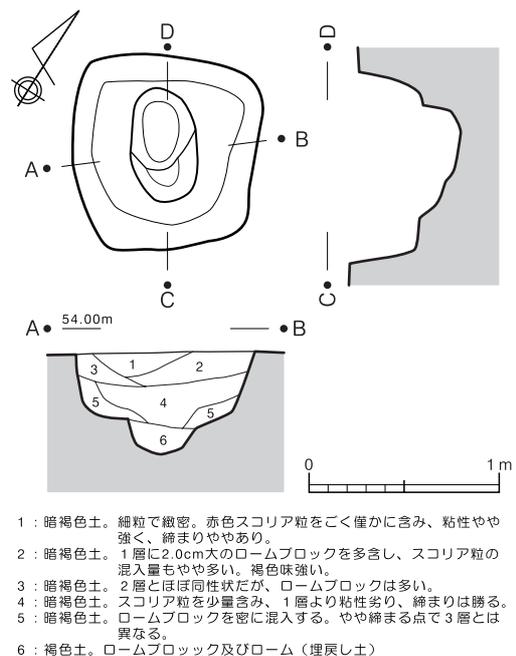
坑底はⅥ層中に構築される。坑底の状況は、周壁同様あまり凹凸は見られずほぼ平坦堅緻である。坑底のほぼ中央には径60×34cm、坑底からの深さ18cmを測る平面形状が楕円形を呈する施設が確認された。この施設は40cmほどの楕円形の掘り込みが重複したような形状を呈していたが、施設内の堆積土の観察からは新旧関係を掴むことはできなかった。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、ロームブロックなどの混入層も認められたが、いずれも自然堆積の様相を呈していた。ただし、坑底施設の堆積土はロームブロックとロームを用いた人為的に埋め戻された層であることが確認されている。出土遺物は皆無であった。

なお、土坑の軸に関しては、坑底施設の長軸方向をもって土坑の軸と考えている。



第11図 7号土坑



第12図 8号土坑

・ 9号土坑 (第13図)

本遺構は調査区の南西寄りのC-7-b2~d3グリッドに位置している。IV層中にて確認された遺構である。

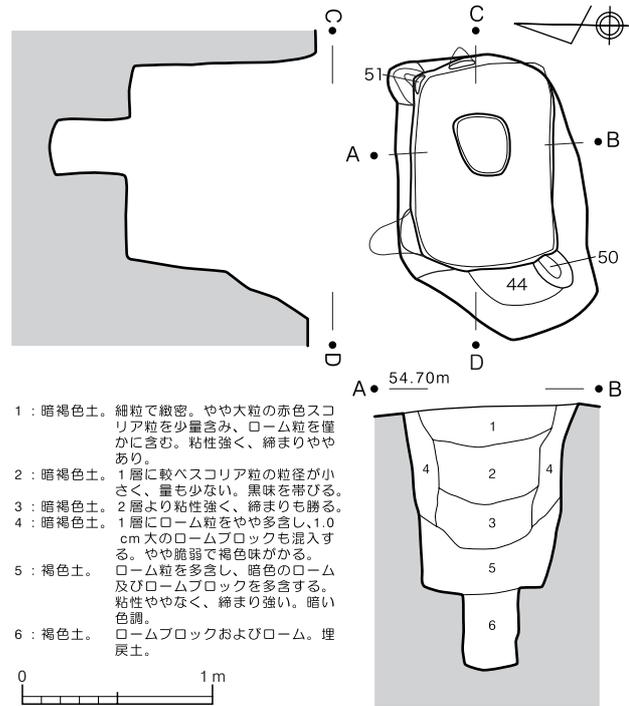
開口部で1.52×1.01m、坑底で1.07×0.73mを測り、平面形状は開口部が不整形を呈し、坑底は短辺の胴が張る隅丸長方形を呈している。現存する掘り込みは1.02mとやや深く、長軸をN-91°-Eに向けている。

周壁は西側がかなり垂直に近い角度で掘り込まれているのに対し、その他はやや角度をもって掘り込まれており、その境界には稜を有している。坑底との境目も非常に明確で角を切っているような印象すら受けるほどである。周壁の状態は、凹凸があまり見られず堅緻で良好である。また、周壁の一部には足掛け穴と考えられる窪みやステップ状の平場を有している。

坑底はVI層中に構築される。坑底も周壁同様に平坦かつ堅緻で、中央より東へ寄った場所に34×28cm、坑底からの深度44cmを測る、平面形状が台形を呈した坑底施設を有している。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、周壁近くではロームブロックを混入する周壁の崩落土と考えられる層も認められた、いずれも自然堆積の様相を呈していた。ただし、坑底施設の堆積土はロームブロックとロームを用いた人為的に埋め戻された層であることが確認されている。

出土遺物は皆無であった。



第13図 9号土坑

・ 10号土坑 (第14図)

本遺構は調査区の西寄りの調査区境際のB-4-b1~c1グリッドに位置している。IV層下面にて確認された遺構である。

開口部で1.48×0.76m、坑底で1.17×0.48mを測り、平面形状は開口部が長い楕円形を呈し、坑底では細長い隅丸の長方形を呈している。現存する掘り込みは0.77mとやや深く、長軸をN-47°-Eに向けている。

周壁は垂直に近い角度で掘り込まれている。周壁の状態は、凹凸があまり見られず堅緻で良好である。一部に足掛け穴とも見受けられるピットが確認されている。また、坑底へは緩やかに移行し、その境目はやや不明瞭である。

坑底はVI層中に構築される。坑底も周壁同様に平坦かつ堅緻で、長軸上に4穴の柱痕状の施設が確認されている。その規模は16~28cm、坑底からの深さが12~37cmを測り、形状、深さともにさまざま

である。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、周壁近くではロームブロックを混入する周壁の崩落土と考えられる層も認められが、いずれも自然堆積の様相を呈していた。ただし、坑底施設の堆積土はロームブロックとロームを用いた人為的に埋め戻された層であることが確認されている。

出土遺物は、堆積土中より1点の縄文土器が確認されている。P001は深鉢胴部片である。器厚は1.1cmを測り、胎土にはごく微細な白色柱状物を含んでいる。焼成は良好で、色調は外面が暗橙褐色、内面が暗褐色を呈している。外面に貝殻条痕文を縦位に施している。

・11号土坑（第15図）

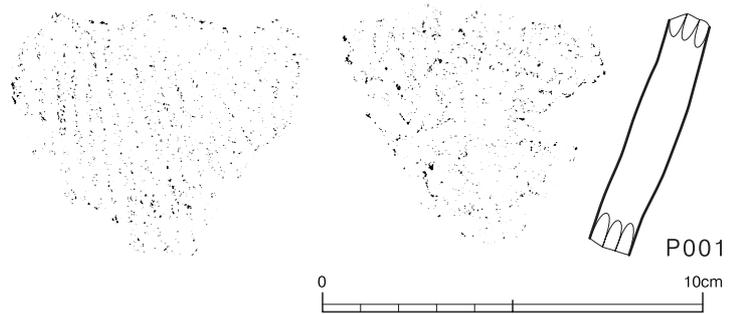
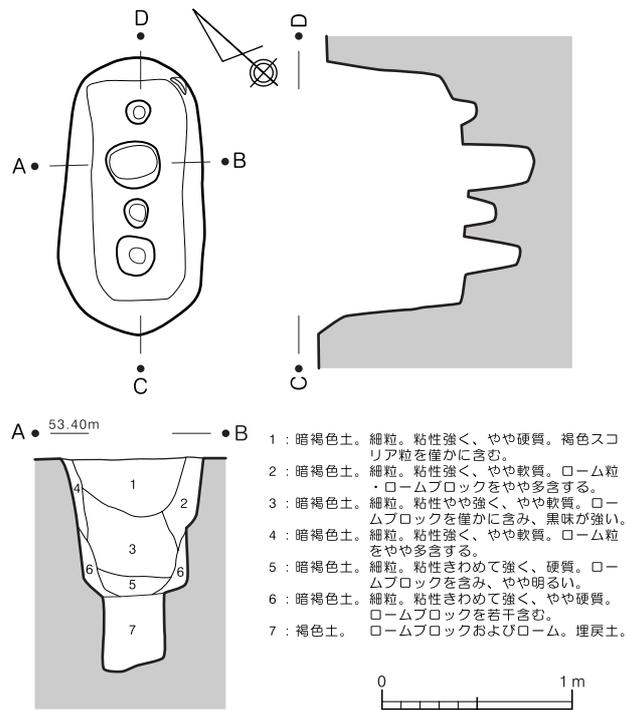
本遺構は、調査区ほぼ中央のE-6-b3~c4グリッドに位置し、北西でやや大きめのピット状の掘り込みと重複している。Ⅳ層下面にて確認された遺構である。

開口部で1.15×0.85m、坑底で0.80×0.60mを測り、平面形状は開口部、坑底ともに隅丸の長方形を呈している。現存する掘り込みは、最大で0.80mを測るやや深い掘り込みで、長軸方向をW-53°-Nに向けている。

周壁は、全体的にほぼ垂直に掘り込まれているものの、開口部付近で僅かに外側へと角度をもって掘り込まれている。また、周壁と坑底との境目は明瞭でしっかりしている。周壁の状態はさほど凹凸も見られず、比較的堅緻で良好である。

坑底はⅥ層中に構築される。全体的に凹凸がなく、平坦に設えられており非常に堅緻である。坑底のほぼ中央から南東寄りには径25×26cm、坑底からの深さ48cmを測る平面形状が円形を呈する施設が確認された。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、周壁近くではロームブロックを混入する周壁の崩落土と考えられる層も認められが、いずれも自然堆積の様相を呈していた。ただし、坑底施設内の堆積土については、上面が硬く締まり、ロームブロックとロームを用いた人為的に埋め戻された層であることが確認されている。



第14図 10号土坑

出土遺物は皆無である。

重複したピット状の掘り込みとの新旧関係は、土層観察では掴むことができなかったが、非常に似通った堆積土であったことから、さほど時間差無く構築されたものとする。

・12号土坑 (第16図)

本遺構は調査区ほぼ中央北寄りのE-4-b2~b3グリッド、3号土坑の南西に位置している。V層中にて確認された遺構である。

開口部で1.50×1.25m、坑底で1.05×0.97mを測り、平面形状は開口部が不整の楕円形を呈し、坑底は台形を呈している。現存する掘り込みは最大で1.44mと非常に深く、長軸をW-3°-Nに向けている。

周壁はやや角度をもって掘り込まれており、坑底より約70cm上部のところでは僅かに角度を変えて、外側へと開き気味に立ち上がっている。坑底との境目は北側のみやや不明瞭であるが、残る3辺は明瞭である。周壁の状態はわずかに整形に凹凸が見られるものの、比較的堅緻で良好である。また、一部に足掛け穴とも考えられるピットやステップ状の平場を有している。

坑底はVI層中に構築され、平坦に設えられており非常に堅緻である。なお、坑底施設は確認されなかった。

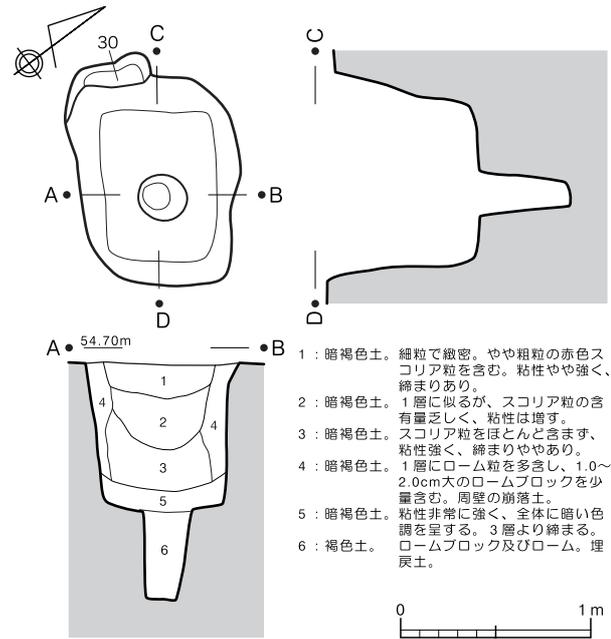
堆積土は、標準堆積層III層相当の暗褐色土で、周壁近くではロームブロックを混入する周壁の崩落土と考えられる層も認められが、いずれも自然堆積の様相を呈していた。また、8層はロームブロック及びロームからなる層で、人為的に埋め戻され、上面は坑底のように設えられていた。

出土遺物は皆無である。

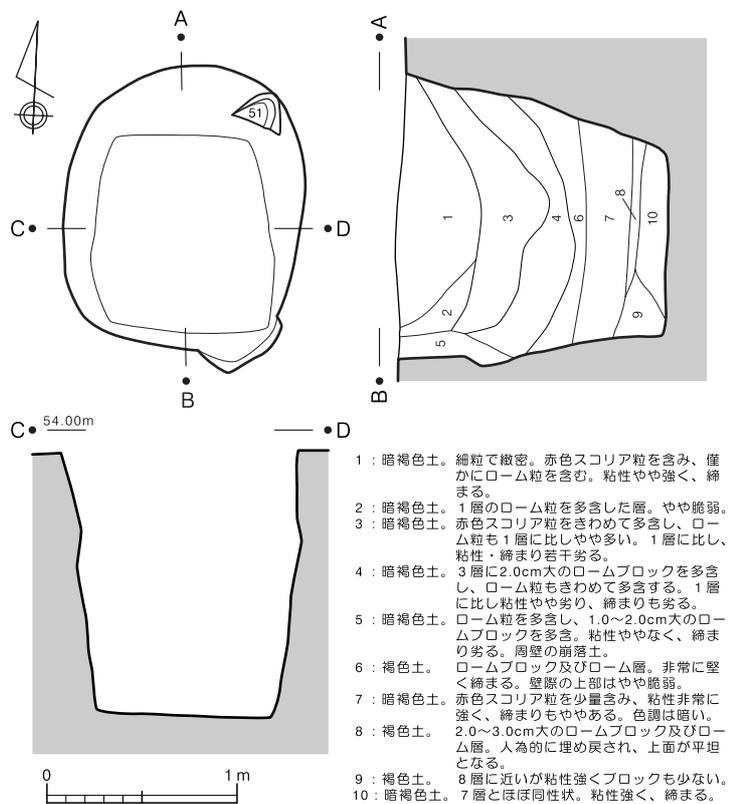
炉穴

・1号炉穴 (第17図)

本遺構は調査区北側のD-2-cl~



第15図 11号土坑



第16図 12号土坑

d1グリッド、2号炉穴の北東に位置し、北西側でピット状の掘り込みと重複している。IV層下面にて確認された遺構で、遺存状態はやや悪い。

現存する規模は開口部で0.98×0.98m、底面で0.84×0.88mを測り、開口部、底面ともに平面形状は円形を呈している。現存する掘り込みは18cm程度で、底面付近でV層に達する程度である。掘り込みのやや長く感じられる方向をW-62°-Nに向けている。

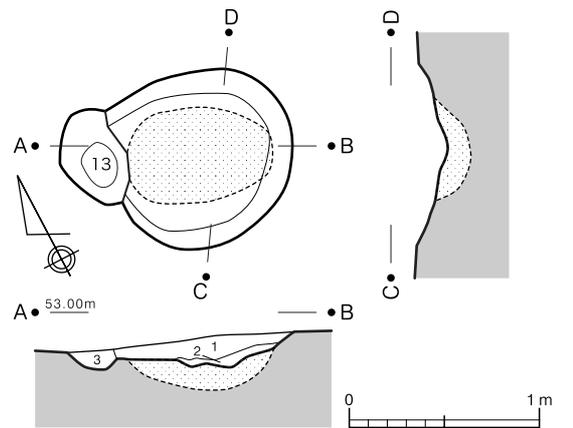
現存する掘り込みの周壁は、ごく緩やかに掘り込まれ、浅い皿状をなしている。掘り込んでいる地山の状態から、やや軟弱で遺存状態も決して良好とは言えない。

底面とほぼ同じ範囲の75×51cmほどが、被熱により赤化している。この被熱により赤化している範囲は最大で深さ14cmにも達している。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、全体に焼土粒が散っており、遺構確認時から炉穴の可能性があると判明していた。

この遺構の軸と考えられる向きの南西側にはピット上の掘り込みと重複していたほか、遺構確認面からの掘り込みの遺存状態がきわめて少なかったためにはっきりとしたことは分からないが、隣接する2号炉穴の占地状況をみると、斜面の下側に当たる側に足場となる掘り込みが存在していた可能性が考えられる。

出土遺物は皆無である。



1: 暗褐色土。粘性やや強く、やや硬質で細粒。締まり強い。焼土粒を僅かに含む。
2: 暗赤褐色土。粘性強く、硬質。やや細粒で焼土粒を多量に含む。赤味強い。
3: 明褐色土。粘性強く、硬質で細粒。締まり強い。ロームブロック・ローム粒をやや多量に含む。

第17図 1号炉穴

・2号炉穴（第18図）

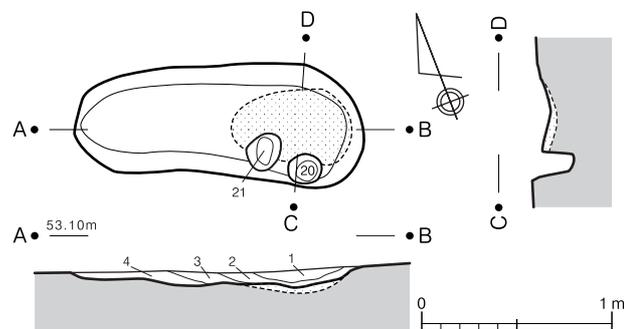
本遺構は、D-2-b2グリッド、1号炉穴の南西に位置している。IV層下面にて確認された遺構で、遺存状態はやや悪い。

開口部で1.53×0.65m、底面で1.38×0.45mを測り、平面形状はともに細長の小判形を呈している。

現存する掘り込みはごく浅い掘り込みで、最も残存している部分でも10cm程度である。また、掘り込みの長軸方向はN-111°-Eに向けている。

周壁はきわめて緩やかに掘り込まれ、また、遺構確認面が低かったために、周壁の残存状態はきわめて悪く、また、掘り込んでいる地山の性質と相まって遺存状態は良好とはいえない状況であった。

掘り込みの長軸方向の南東側の底面には、70×40cmほどの範囲で平面形状が楕円形を呈する形状で被熱により赤化している箇所が確認された。



1: 暗褐色土。細粒。粘性やや強く、やや硬質。焼土粒およびローム粒を若干含む。黒味強い。
2: 暗赤褐色土。細粒。粘性やや強く、やや硬質。焼土粒を多量に含む。赤味強い。
3: 暗褐色土。細粒。粘性強く、硬質。ローム粒をやや多量に含む。
4: 明褐色土。細粒。粘性強く、硬質。ローム粒を多量に含む。ロームブロックを僅かに含む。褐色味強い。

第18図 2号炉穴

この被熱による赤化範囲は深さ7cmを測る。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、火床と考えられる赤化範囲上部において、遺構確認時から焼土粒が混入していることが確認され、炉穴の可能性があると判明していた。また、全体的に粘性が強い堆積土であった。

ピットが2か所に確認されたが、これらのピットは本遺構に伴わない新しい時期のものであることが掘削時の土層の肉眼観察によって判明している。

出土遺物は皆無である。

・3号炉穴（第19図）

本遺構は調査区南東部のF-7-d1グリッド、4号炉穴の北東に位置し、北側でピット状の掘り込みと重複している。Ⅳ層下面にて確認され遺存状態はやや悪い。

現存する規模は開口部で0.74×0.68m、底面で0.54×0.51mを測り、開口部、底面ともに平面形状は不整の円形を呈している。現存する掘り込みは浅く、最も残存している部分でも10cm程度で、底面付近でⅤ層に達する程度である。掘り込みのやや長い方をW-7°-Nに向けている。

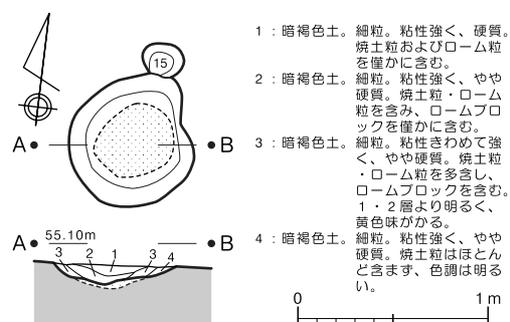
現存する掘り込みの周壁は、ごく緩やかに掘り込まれ、浅い皿状をなしている。掘り込んでいる地山の状態から、やや軟弱で遺存状態も決して良好とは言えない。

底面よりやや狭い範囲の42×46cmほどが、被熱により赤化している。この被熱により赤化している範囲は最大でも深さ5cm程度である。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、全体に焼土粒が散っており、遺構確認時から炉穴の可能性があると判明していた。

出土遺物は皆無である。

周囲を具に観察したが、掘り込みが浅かったためもあって、2号炉穴のような足場となるような掘り込みは確認できなかった。また、ピット状の掘り込みとの新旧関係については、土層観察によって本遺構が先行して構築されたものとする。



第19図 3号炉穴

・4号炉穴（第20図）

本遺構は調査区南東部のF-7-c1~c2グリッド、3号炉穴の南西に位置し、東側でピット状の掘り込みと重複している。Ⅳ層下面にて確認され遺存状態はやや悪い。

現存する規模は開口部で0.68×0.57m、底面で0.50×0.36mを測り、開口部、底面ともに平面形状は不整の楕円形を呈している。現存する掘り込みは浅く、最も残存している部分でも8cm程度で、底面付近でⅤ層に達する程度である。掘り込みの長軸をW-8°-Nに向けている。

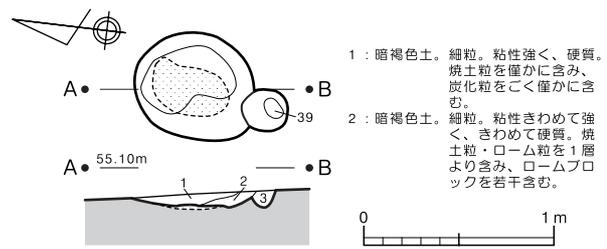
現存する掘り込みの周壁は、ごく緩やかに掘り込まれ、浅い皿状をなしている。掘り込んでいる地山の状態から、やや軟弱で遺存状態も決して良好とは言えない。

底面にはやや南側に寄った45×28cmほどが、被熱により赤化している。この被熱により赤化している範囲は最大でも深さ3cm程度と非常に浅い。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、全体に焼土粒が散っており、遺構確認時から炉穴の可能性があると判明していた。

出土遺物は皆無である。

周囲をつぶさに観察したが、掘り込みが浅かったためもあって、2号炉穴のような足場となるような掘り込みは確認できなかった。また、ピット状の掘り込みと新旧関係については、土層観察によってピット状の掘り込みが、本遺構に先行して構築されたものとする。



第20図 4号炉穴

・5号炉穴（第21図）

本遺構は調査区南西部にあたるC-6-a1~b2グリッドに位置する。Ⅳ層下面にて確認され、遺存状態は良好である。遺構確認時には細長いいわゆるTピットと考えていた遺構である。

現存する規模は開口部で2.20×0.75m、底面で1.99×0.60mを測り、開口部、底面ともに平面形状は長めの隅丸長方形を呈している。現存する掘り込みは他の炉穴に比べ深く、周壁ですでにⅥ層に達し最も深い部分で36cmを測る。掘り込みの長軸方向はN-119°-Eに向けている。

現存する掘り込みの周壁は、長辺はほぼ垂直に短辺はやや角度をもって掘り込み、緩やかに底面へと移行している。また、さほど凹凸は見られず、遺存状態は良好であった。

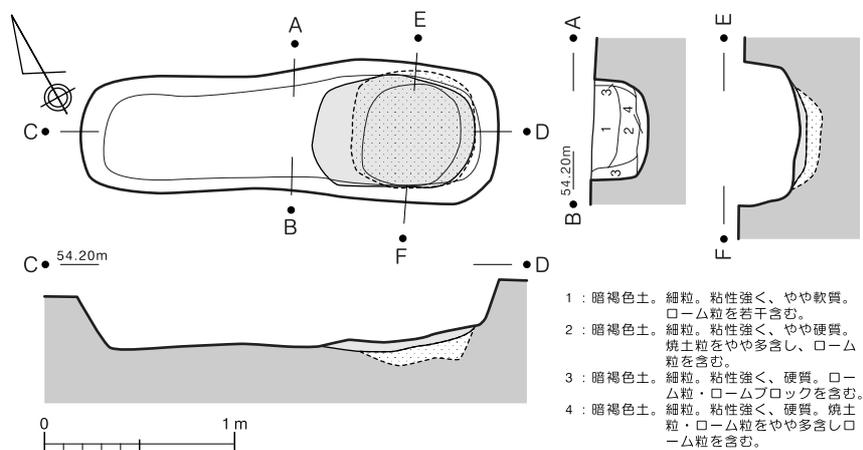
底面はⅥ層中に構築される。ほぼ平坦で堅緻に設えられるが、若干北西側へと傾斜している。周壁同様に遺存状態は良好である。底面の南側には径90×60cmほどの範囲で被熱による赤化が認められた。この被熱部分には一部黒色土を混じえる貼床状の場所が確認された。そこで、この部分を断ち割って確認したところ、下部にもさらに被熱による赤化部分が存在していることが確認された。この赤化範囲は径70×60cmとなっており、赤化範囲は掘り込み底面より約10cm深くまで達していることが判明した。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、周壁の上方ロームブロックを多含する層が確認された。

この堆積土は、掘り込みの長辺上部が内側に大きく張り出していたものが崩落したものである。

出土遺物は皆無である。

赤化した黒褐色土については、いわゆる足場とされる掘り込み面より高く、被熱により土の性状が硬化することを考えると堆積土の一部であることも推測された。



第21図 5号炉穴

しかし、上面が堅緻で面的に捉えられたためこの面を一時火床として使用していたものと考えた。

・6号炉穴（第22図）

本遺構は調査区ほぼ中央にあたるE-6-c1~d2グリッドに位置する。遺構の東側には国土地理院設置の石杭が設置されていたため、その部分についての調査は断念し調査範囲から除外した。このため、遺構の全貌を見ることはできなかった。IV層中にて確認され、北側でピット状の掘り込みと重複するものの、遺存状態は良好である。

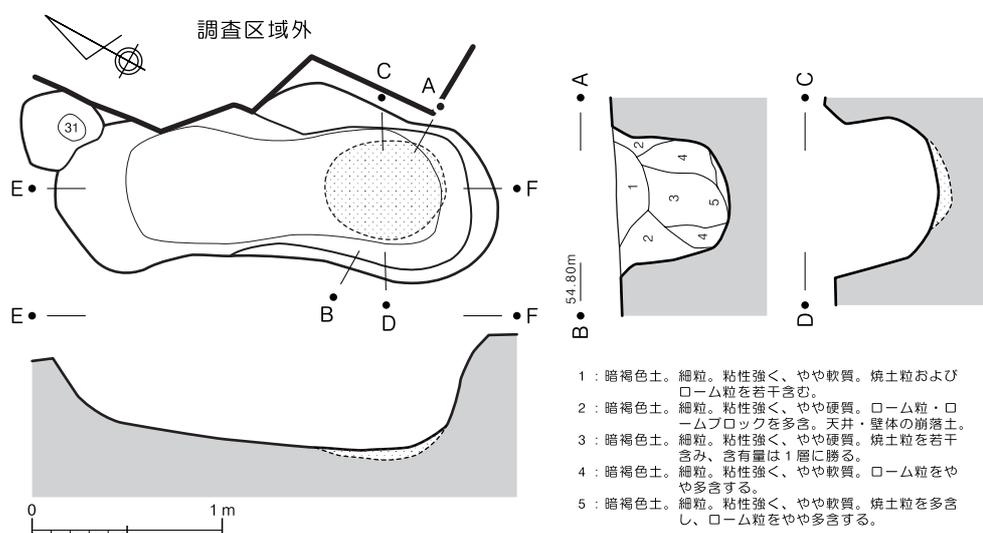
現存する規模は開口部で2.34×1.05m、底面で1.83×0.60mを測り、開口部、底面ともに平面形状は長めの不整な隅丸長方形を呈している。現存する掘り込みは他の炉穴に比べ深く、周壁ですでにVI層に達し最も深い部分で60cmを測る。掘り込みの長軸方向はN-151°-Eに向けている。

現存する掘り込みの周壁は、長辺はほぼ垂直に短辺はやや角度をもって掘り込み、緩やかに底面へと移行している。また、東側の短辺においては、掘り込みの上方が内側へとせり出す形状をとっている。

周壁の状態にはさほど凹凸は見られず、遺存状態は良好であった。

底面はVI層中に構築される。ほぼ平坦で堅緻に設えられるが、わずかに南東方向へと傾斜している。周壁同様に遺存状態は良好である。底面の南東側には径65×32cmほどの範囲で被熱による赤化が認められた。赤化範囲は掘り込み底面より約8cm深くまで達していることが判明した。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、周壁の上方ロームブロックを多含する層が確認された。この堆積土は、掘り込みの長辺上部が内側に大きく張り出していたものが崩落したものと考える。



第22図 6号炉穴

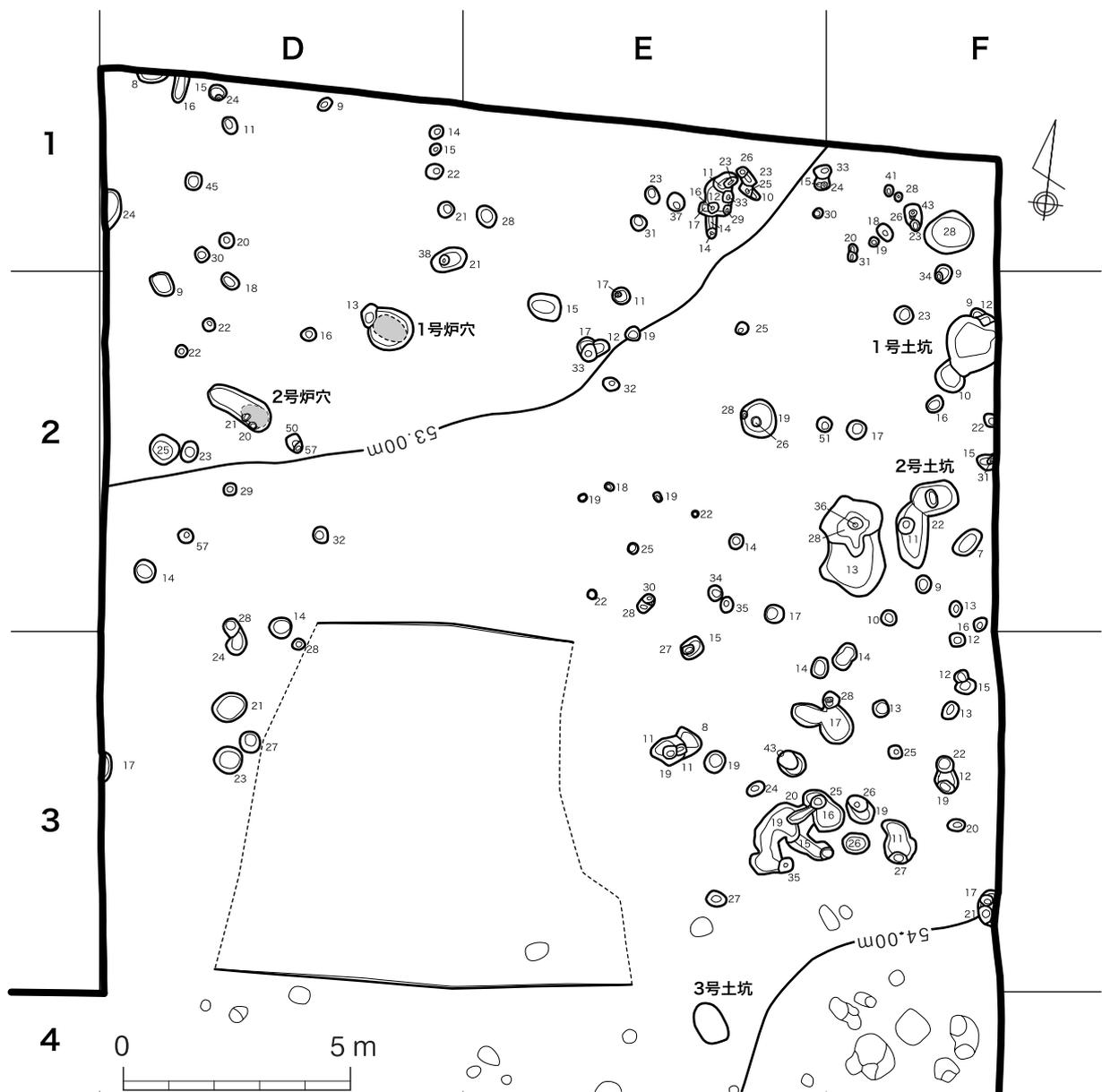
出土遺物は皆無である。

ピット群（第23～27図）

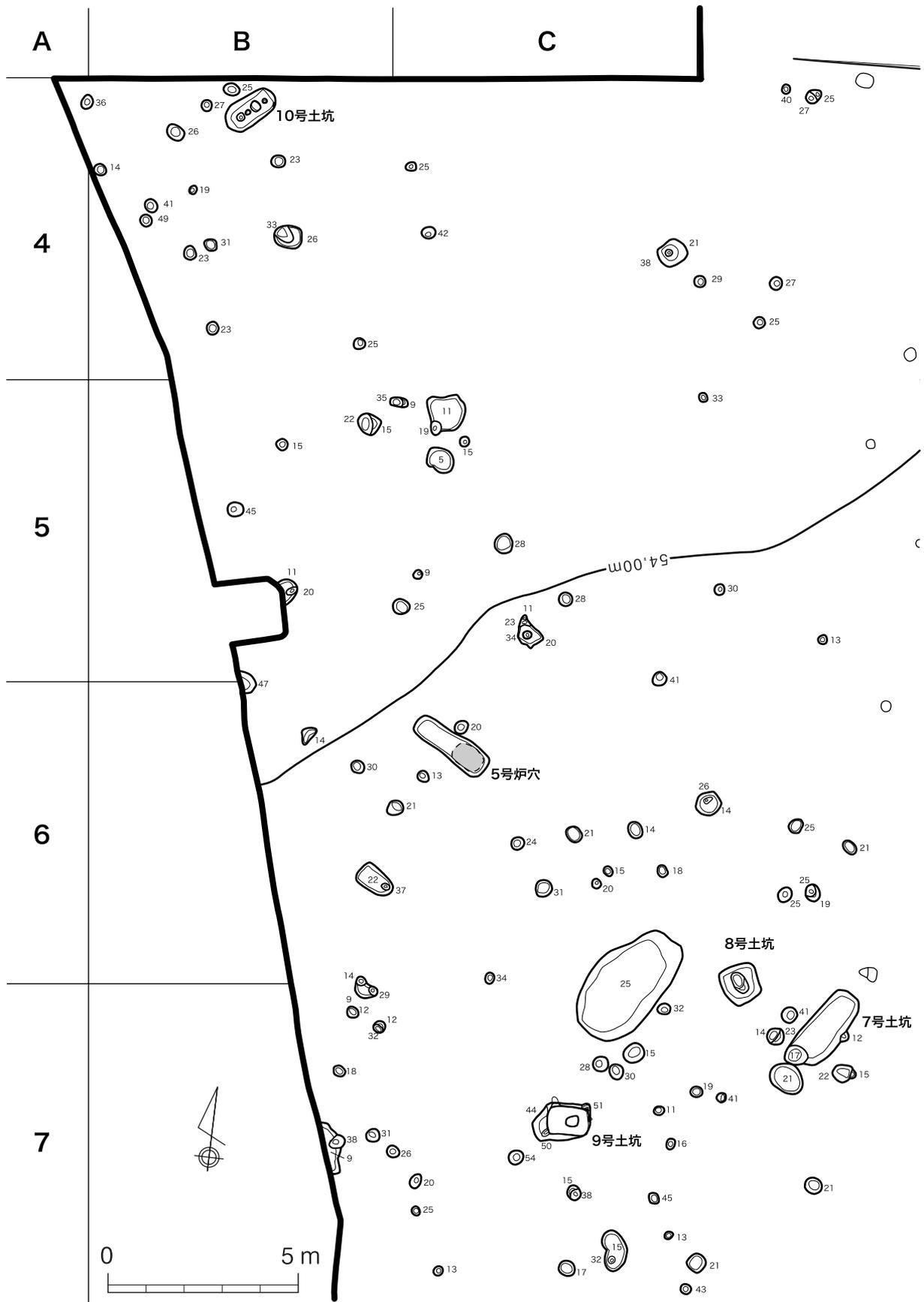
調査区の全域に散在してピットが検出された。柱状のものも存在するが、掘り込みが浅く不明瞭のものも相当数存在する。また、ある程度の規模をもった掘り込みも存在したが、その堆積土はこれまで紹介した遺構とは異なり、脆弱であったり掘り込み内に人為的な整形も認められないなど、土坑として遺構として扱うには根拠が乏しいものであった。

また、これらのほかにも、大型のシミ状の落ち込みが数か所で確認されている。これらの落ち込みは、ロームの周囲を暗褐色土がドーナツ状取り囲んだ状況や大部分が暗褐色土で、土坑が重複しているような状況を呈していた。これらの落ち込みはいわゆる倒木跡と呼ばれるものである。これらの倒木跡のうち、土坑状の掘り込みと重複しているような痕跡の箇所については掘削調査を行なったが、一様にロームブロックと暗褐色土が逆転しており、倒木跡の典型的な堆積状況を示していた。

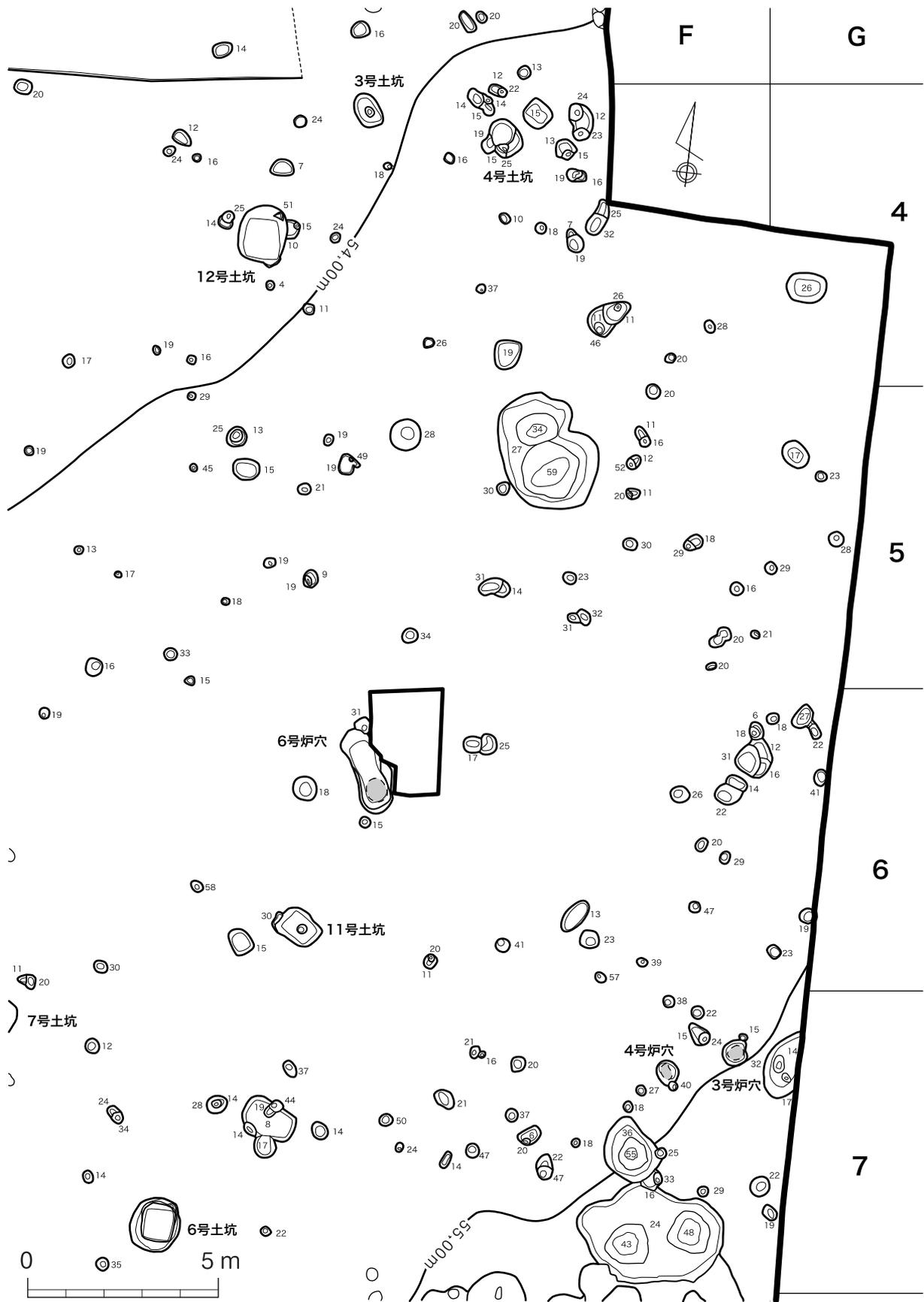
P002・P003はC～D-6～7グリッド内9号土坑の東側に位置する倒木痕から出土した遺物である。P002は深鉢土器の底部破片である。器厚は1.2cmを測り、胎土にはごく微細な褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、内面が暗赤褐色を呈している。無文で、底部周辺を丸く作っているほかさしたる特徴がない。P003は深鉢胴部片である。器厚は0.9cmを測り、胎土にはごく微細な砂粒をごく僅かに含む。焼成は良好で、色調は外内面ともに暗褐色を呈している。外面に斜位の貝殻条痕文を施す。



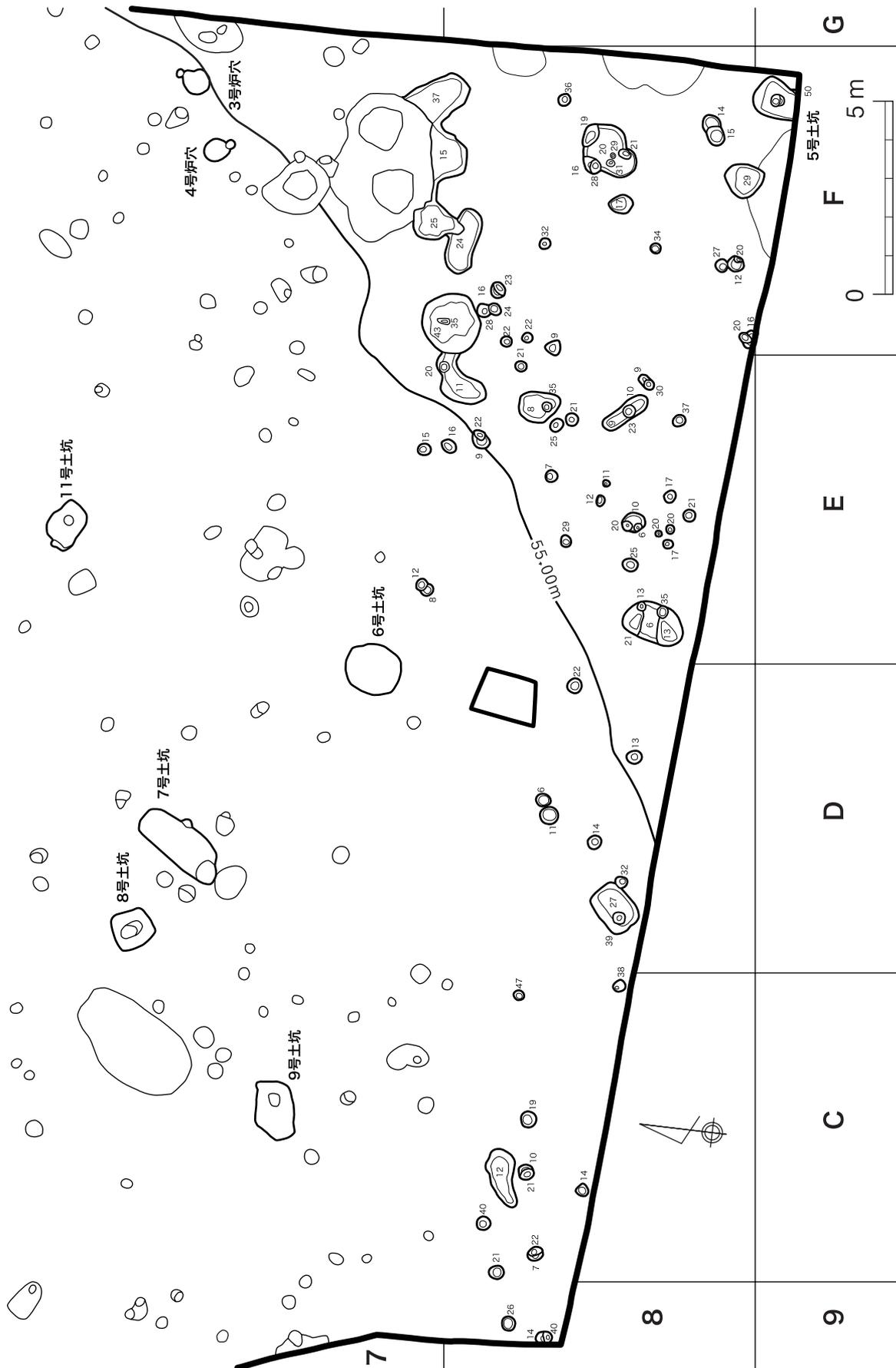
第23図 ピット群1



第24図 ピット群2



第25図 ピット群3

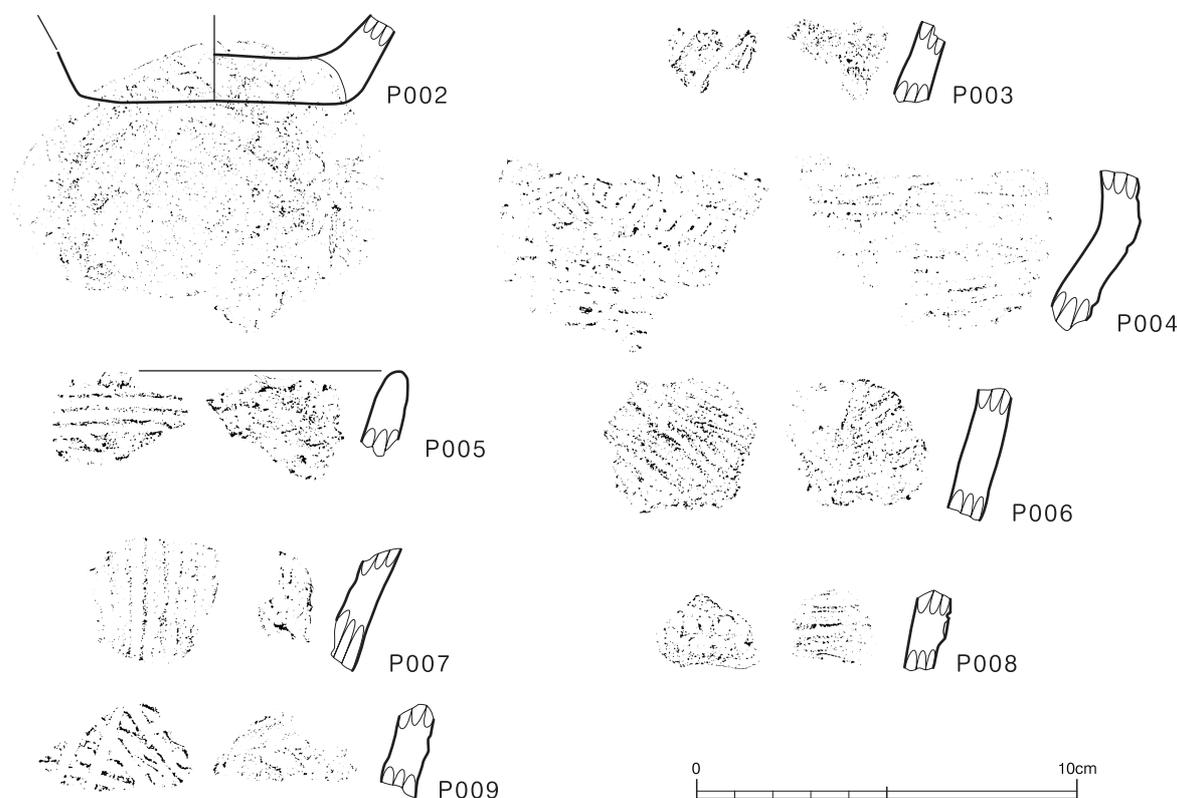


第26図 ピット群4

遺構外出土遺物（第27図）

本遺跡の大半の出土遺物は、遺構外からのものとなっている。

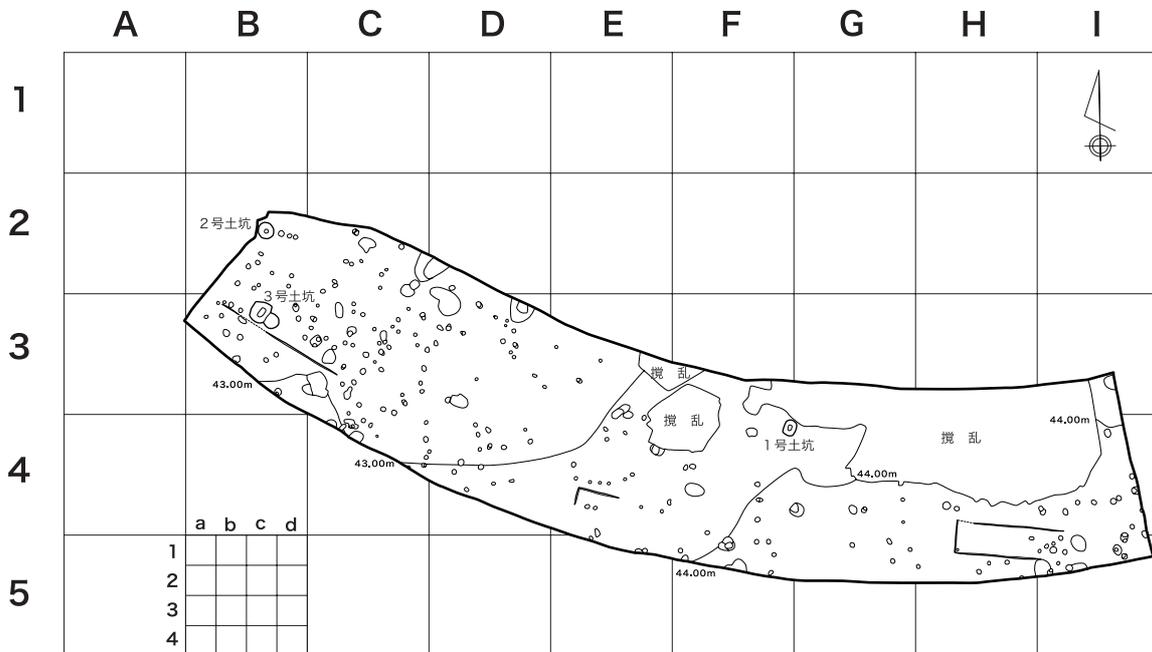
P004～P008はE-2～3グリッドⅢ層から出土した土器である。P004は深鉢胴部片である。器厚は1.0cmを測り、胎土には微細な白色粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調は外面が淡橙褐色、内面が淡褐色を呈している。外面に沈線で山形に施文し、棒状工具による刺突及び条線を施す。屈曲部より下には横位の貝殻条痕文を施す。内面には横位の貝殻条痕文を施す。P005は深鉢口縁部片である。器厚は0.8cmを測り、胎土にはごく微細な砂粒をごく僅かに含む。焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、内面が暗橙褐色を呈している。外面に横位の貝殻条痕文を施し、内面は無文で成形は粗い。P006は深鉢胴部片である。器厚は1.0cmを測り、胎土にはごく微細な砂粒をごく僅かに含む。焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、内面が暗橙褐色を呈している。外面に斜位の貝殻条痕文を施し、器面は摩耗し遺存状態は悪い。内面は横位に貝殻条痕文を施すが、浅く施文される。P007は深鉢胴部片で、器厚は0.9cmを測る。胎土には微細な砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外内面ともに暗褐色を呈している。外面は縦位の貝殻条痕文を施し、内面の大半は欠損し不明である。P008は深鉢胴部片である。器厚は1.0cmを測り、胎土にはごく微細な砂粒をごく僅かに含んでいる。焼成は良好で、色調は外内面ともに暗褐色を呈している。P009は表面採取資料である。調査区設定時にD-5-a1杭付近で採取した。深鉢胴部片で、器厚は1.0cmを測る。胎土にはごく微細な砂粒をごく僅かに含み、焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面が暗橙褐色を呈している。外面に格子状の沈線が施される。内面には横位の貝殻条痕文とも思える痕跡があるが、浅く不明である。



第27図 遺構外出土遺物

(3) 羽沢大丸遺跡

今回の羽沢大丸遺跡で検出された遺構は、縄文時代早期の土坑3基および時期を特定できないピット群（倒木跡を含む）である。以下に検出された遺構の記述を記載する。



第28図 羽沢大丸遺跡遺構分布図（縮尺1/500）

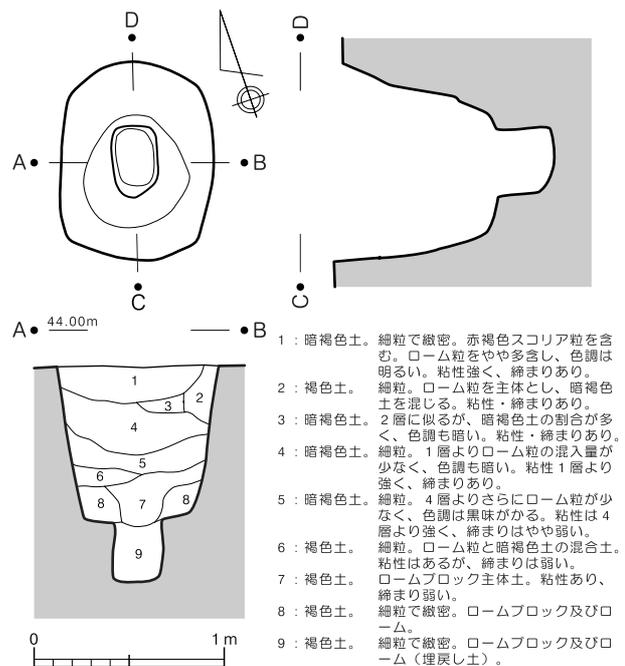
土坑

・1号土坑（第29図）

本遺構は調査区のはほぼ中央、北壁寄りのF～G-4-d1～a1グリッドに位置している。北側の一部で攪乱と重複する。V層中にて確認された遺構である。

開口部で1.05×0.81m、坑底で0.61×0.55mを測り、平面形状は開口部がやや方形気味の隅丸長方形を呈し、坑底は不整の円形を呈している。現存する掘り込みは0.83mとやや深く、長軸をN-19°-Eに向けている。

周壁はやや開き気味ではあるが、垂直に近い角度で掘り込まれている。周壁の状態は、北側を除き凹凸はあまり見られず堅緻で良好である。また、坑底へは緩やかに移行するが、西側ではその境目は明瞭である。



第29図 1号土坑

坑底はⅥ層中に構築される。坑底も周壁同様に平坦かつ堅緻で、底面のやや北側に寄った位置に一辺が40×23cmを測る坑底施設を有している。この施設は、坑底からの深さは33cmを測り、掘り込みの一部が袋状をなしている。

堆積土は、標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、堆積土の一部にローム粒を主体とする層が確認されたが、これは周壁が崩落した際の堆積土と考えられる。また、坑底施設内にはロームブロック主体土が確認されたが、こちらは人為的に埋め戻されたもので、上面は硬く締まっていた。

出土遺物は皆無である。

・2号土坑（第30図）

本遺構は調査区西寄りの調査区境際、B-2-c2~c3グリッドに位置している。Ⅳ層下面にて確認された遺構である。

開口部で1.10×0.72m、坑底で1.03×0.67mを測り、平面形状は開口部、坑底ともに円形を呈している。現存する掘り込みは0.77mとやや深く、やや長め的一方を長軸をW-14°-Nに向けている。

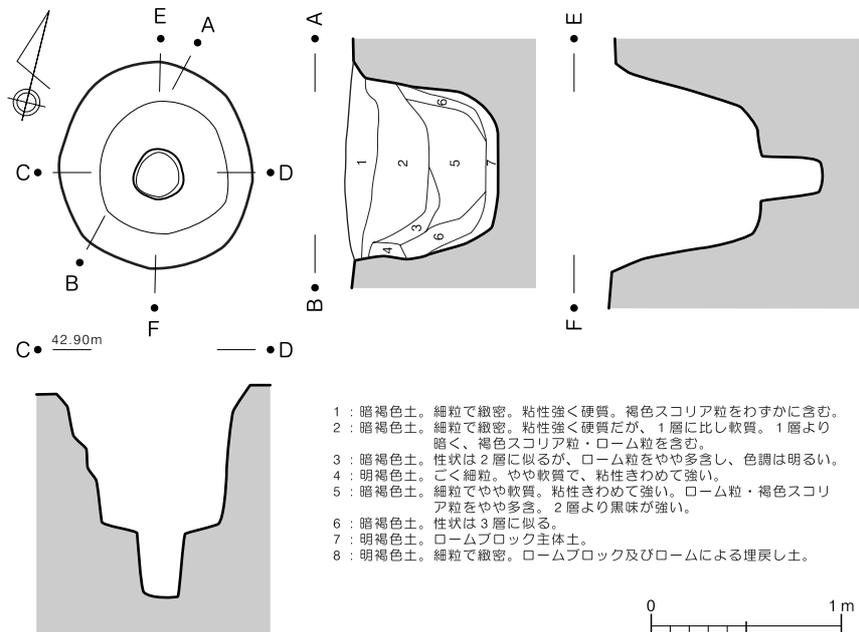
周壁はやや開き気味ではあるが、垂直に近い角度で掘り込まれている。周壁の状態は、西側を除き凹凸はあまり見られず堅緻で良好である。また、坑底へは緩やかに移行するが、西側ではその境目は明瞭である。

坑底はⅥ層中に構築される。坑底も周壁同様に平坦かつ堅緻で、底面のほぼ中央には径25cm、坑底からの深さ33cmを測る坑底施設が確認された。

堆積土は標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、一部にローム粒を多含する層が確認された。これは周壁が崩落したものが堆積したもので、人為的な様相は認められなかった。

また、坑底施設内のロームブロック主体土は人為的に埋め戻されたもので、上面は非常に硬く締まっていた。

出土遺物は皆無である。



第30図 2号土坑

・3号土坑（第31図）

本遺構は調査区の西寄りB-3-c1グリッドに位置している。Ⅳ層下面にて確認され、東側で倒木跡と重複している。

開口部で1.47×1.22m、坑底で0.98×0.77mを測り、平面形状は開口部、坑底ともが隅丸長方形を呈している。現存する掘り込みは0.74mと深く、長軸をN-38°-Eに向けている。

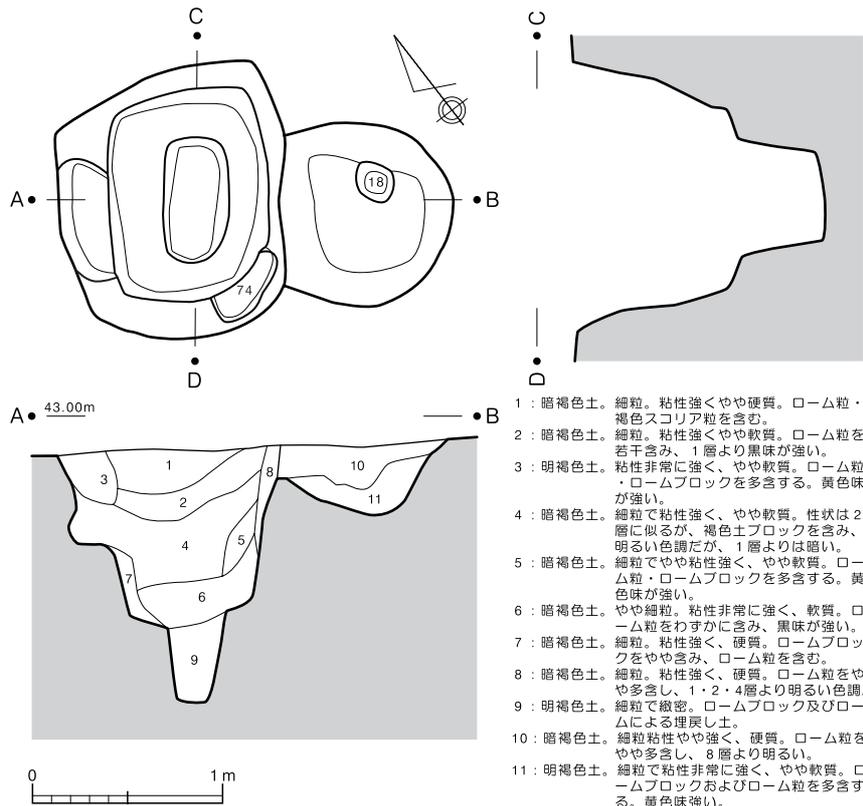
周壁はやや開き気味に掘り込まれている。周壁の状態は、底面より30~40cmほどの高さでは凹凸も見られず堅緻だが、それより上方ではやや凹凸が認められるほか一部ではテラス状を呈している。坑底へは緩やかに移行し、その境目は比較的不明瞭である。

坑底はVI層中に構築される。坑底も平坦かつ堅緻に設えられており、底面ほぼ中央長軸の軸線上に66×35cm、坑底からの深さが47cmを測る坑底施設が設けられている。

堆積土は標準堆積層Ⅲ層相当の暗褐色土で、一部にローム粒を多含する層が確認されたが、これは周壁が崩落したものと考えられる。また、坑底施設内のロームブロック主体土は人為的に埋め戻されたもので、上面は硬く締まっていた。

出土遺物は皆無である。

また、本遺構と倒木跡との新旧関係は、土層観察により本遺構が後出するものであることが判明している。



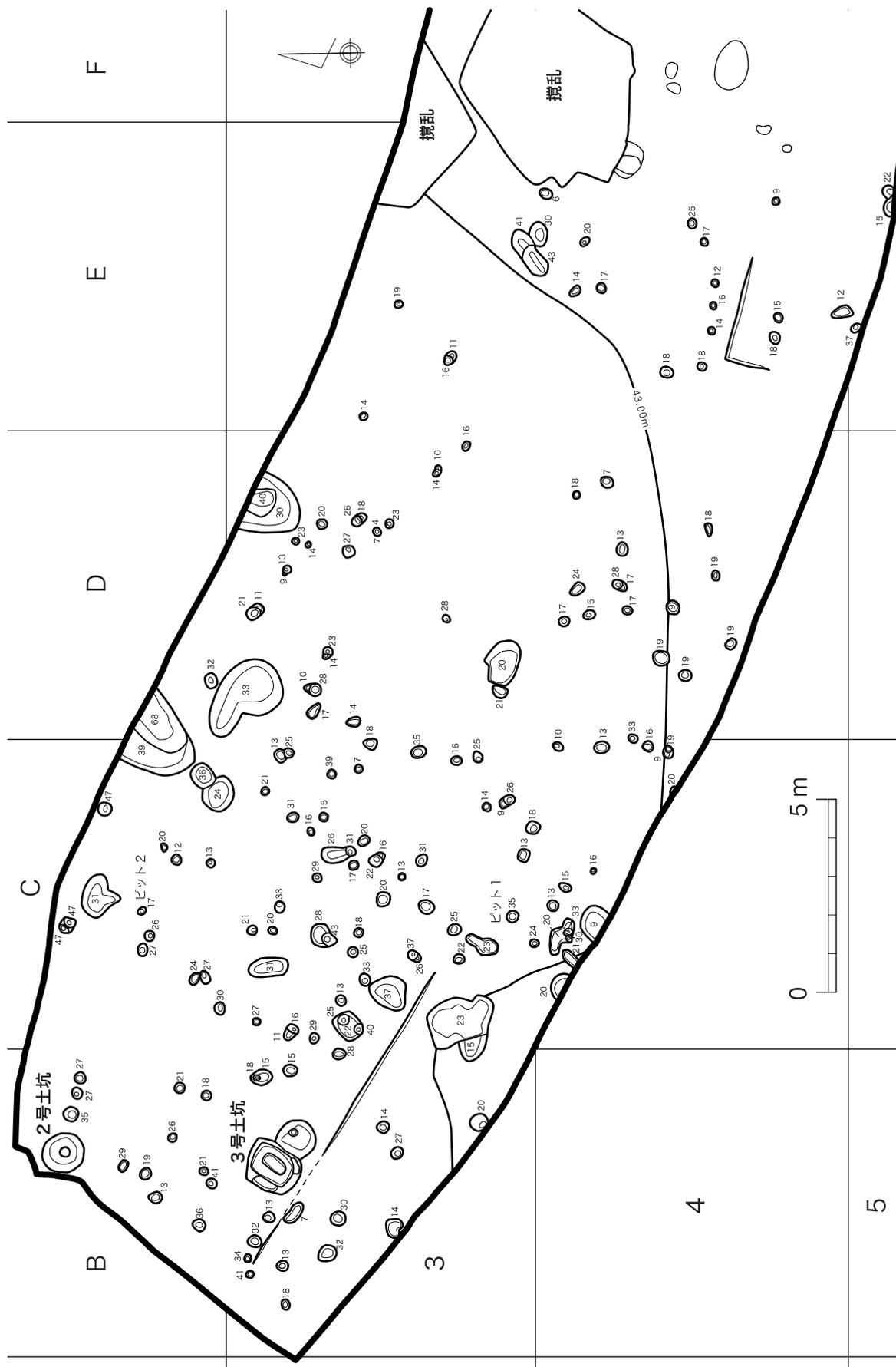
第31図 3号土坑

ピット群 (第32図~第34図)

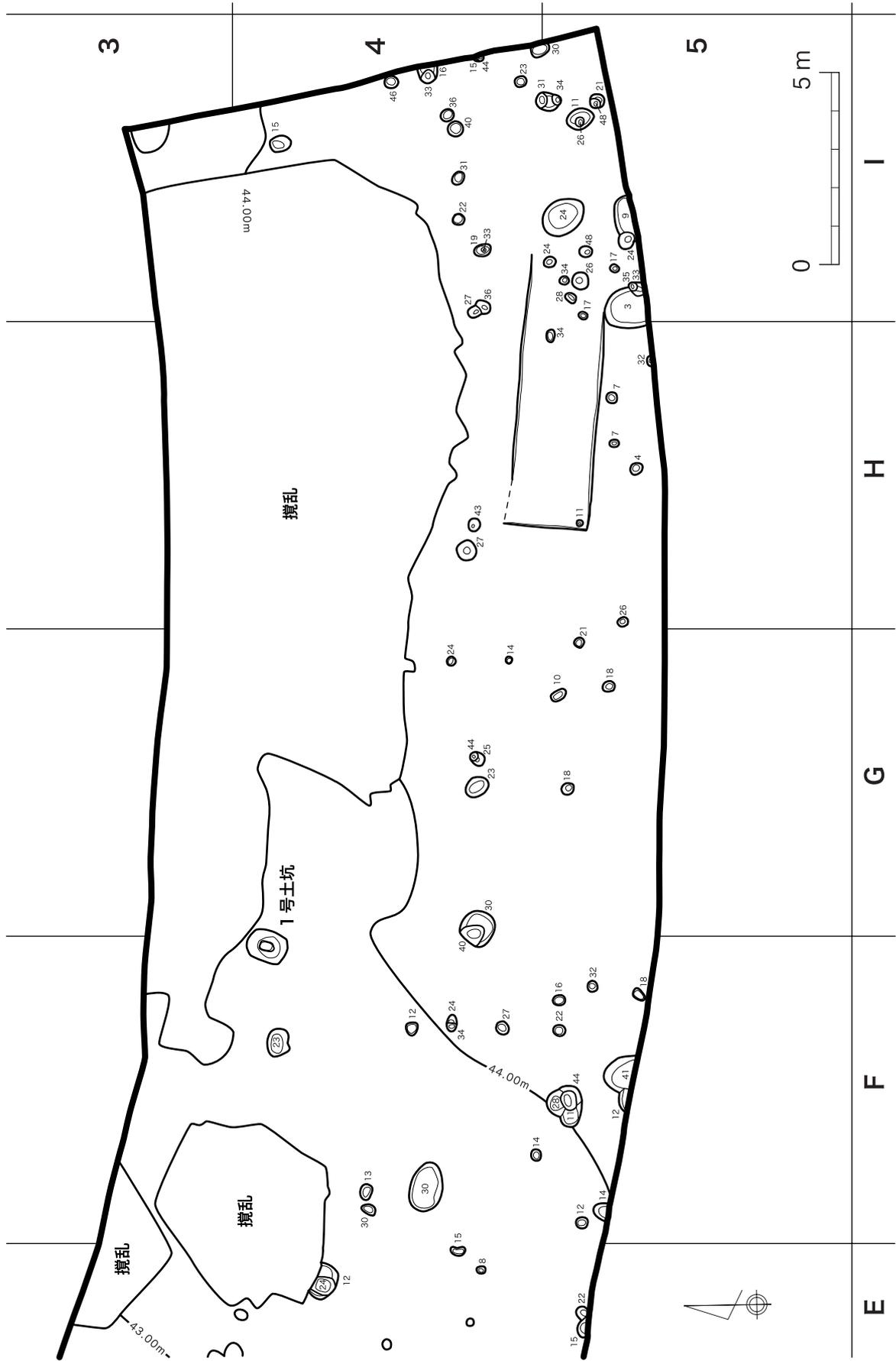
羽沢大丸遺跡においても、調査区の全域に散在してピットが検出された。このうち、2穴のピットから遺物が出土している。P001はピット1覆土からの出土資料である。深鉢胴部片で器厚は0.6cmを測る。色調は外内面ともに暗橙褐色を呈し、外面に斜めの沈線が施され内面は横位の調整痕が確認できる。P002はピット2覆土からの出土資料である。深鉢胴部片で、器厚は1.1cmを測る。色調は外内面ともに暗褐色を呈している。外面にRの無節縄文を施し内面には繊維痕が認められる。



第32図 ピット群出土遺物



第33図 ピット群1



第34図 ピット群2

第4章 まとめ

今回の調査は、都市計画道路羽沢池辺線（羽沢・菅田地区）街路整備事業に伴って2つの遺跡の本発掘調査を実施した。2つの遺跡は、都市計画道路環状2号線道路を挟んだ近接する位置に立地している。この辺りの地形は、東側から谷が入っており分断されているが、いずれも帷子川の東側に展開する台地の支脈上に位置しており、羽沢具行遺跡が台地頂部から北側に向いた緩斜面上に、羽沢大丸遺跡も北側に傾斜する斜面上に位置している。2つの遺跡で検出された遺構はいずれも縄文時代早期のもので、土坑25基（羽沢具行遺跡12基、羽沢大丸遺跡3基）、炉穴6基（羽沢具行遺跡）となっている。

土坑の特徴については、検出数が少ないため細かな形態分類するほどではないが、大きく分けると逆茂木穴と考えられる坑底施設が認められるもの8基、認められないもの5基とに分別することができる。坑底施設がないものについては掘り込みの非常に深いタイプのもの（6・12号土坑）の存在が興味深い。

また、坑底施設が存在するタイプでは、単独のものと同数のものが認められたが、複数穴のものは10号土坑のケースのみである。

炉穴については、1号炉穴と2号炉穴、3号炉穴と4号炉穴が非常に近接して検出されている点が興味深い。特に3号炉穴と4号炉穴はその形状も似通っている。さらに、5・6号炉穴はその占地位置は離れているものの、遺構の形状や向きなど類似点が多い。また、6号土坑と12号土坑の2つの深い掘り込みをもつ土坑も非常に造りが似通っており、これらの遺構には2つで1つの単位（グループ）ということが考えられそうである。これらの遺構が同時期に存在していたのかは不明であるが、炉穴と土坑の組み合わせ（関係）を掴むためのひとつの資料となり得よう。

また、土坑のほかに数多くのピットが検出されている。これらのうちのいくつかは柱穴状をなしており、柵列や土坑への誘導を行なう施設になる可能性も考えたが、規則性などが見受けられず、明確に施設として造られたと判別するには至っていない。

出土遺物は非常に少ないが、P003・P004・P008など縄文時代早期沈線文系の野島式の特徴を強くだしている土器のほか、P005～P007など条痕文のみの破片が若干確認されている。P002と羽沢大丸遺跡のP002の2点を除いていわゆる条痕文系の土器が主体となっていることから、土坑や炉穴が造られていた時期も、おおよそこれらの土器の時期と同時期のものと考えられる。

今回の調査エリアは、道路事業用地という制限があったため、十分に遺構の広がりや掘り込みを掴むことはできなかった。しかし、その限定エリアにおいてこれだけの遺構が検出されたことは予想外であった。土坑の性格から考えると、事業用地外にも相当数の土坑が存在している可能性が考えられよう。また、旭区の矢指谷遺跡や都筑自然公園予定地内遺跡、緑区の鴨居原遺跡では、土坑が展開する同一の丘陵上から縄文時代早期の竪穴住居跡が検出されている。このような例もあることから、今回の調査範囲では検出されなかったが、調査範囲から外れている未調査エリアに竪穴住居跡が存在することも十分考えられる。

今回の調査では出土遺物がほとんど出土しなかった。また、調査時に周辺の畑地の表面をみてもほとんど遺物が目につかないような状況であった。遺跡の性格上から遺物量が少ないことは仕方がないことであるが、遺物の散布の有無にかかわらず遺構が存在しているという良い例となった。こうした場所での発掘調査については遺構の予想が大変難しく、今後十分注意しなければならないであろう。

用語解説

逆茂木（さかもぎ）

枝のついたままの木や杭などを埋け、防御などに使用する施設のこと。土坑の場合、陥し穴に落ちた動物の足を絡めとって、跳躍力を奪い脱出できなくするために用いられる。坑底での平面形状には円形や楕円形のものや長方形のものなどがあるが、いずれも逆茂木を埋けるための掘り方であり、この大きさの枝などを埋けたものではなく、1つの掘り込み内に複数の枝を埋けたと考えられる。

条痕文系土器（じょうこんもんけいどき）

縄文時代早期後半に、器面の内外に貝殻の腹縁や背面を用いてナデで条線を施文する土器があるが、こうした手法を取り入れている土器群を指している。

倒木跡（とうぼくあと）

木が倒れた跡のこと。台風などの自然現象で木が倒れた時、倒れた直後に根に抱えられていた地山層が一旦浮き上がるが、時間が経つとともに風化や根の腐食によってこの部分の土が下に落ちる。その結果、周囲の地山層と根に抱えられていた地山層（のブロック）との間には別の層が間層として入り込んでしまう。この状態を平面的に見ると、ドーナツ状に黒色土が回り込んだものとなる。このような痕跡を倒木跡と呼び、遺構のように調査する場合もある。

土坑（どこう）

検出される遺構の中で、竪穴住居のような大型の掘り込みや、柱穴のような小型の掘り込みの中間にあたる掘り込みの総称として使用される。所産時期や形状のよっても異なるが、その多くは陥し穴や墓壙（ぼこう＝墓穴のこと）、貯蔵穴などその用途はさまざまである。このうち、陥し穴と考えられる土坑には、坑底施設が存在するものが認められ、逆茂木穴とも称される。概して掘り込みの浅い土坑に多い。

野島式土器（のじましきどき）

横浜市金沢区野島の野島貝塚から出土した土器が標式となっている縄文時代早期後半（今から約8,000年前）の土器形式名。土器の胴上部に文様帯を構成し、微隆線線文で幾何学的な文様を付し、その中を集合沈線や刺突、凹文などで施文する。胴下半や内面には条痕文が施される。また、貝殻条痕文のみで文様帯をもたない土器もある。条痕文系土器のひとつ。

炉穴（ろけつ・ろあな）

縄文時代早期の屋外炉のこと。長細い土坑状の掘り込みの一端に被熱によって赤化した部分をもっている。また、1つの掘り込みからタコ足状にさまざまな方向へと炉床を広げるタイプも存在する。天井部分があったと考えられるが、大半は天井部分は残っておらず、堆積土にその痕跡を認める程度である。

写 真



屏写真 遺構精査風景



写真1 羽沢具行遺跡遠景（南より）



写真2 調査前風景（南東より）



写真3 調査区設定作業風景



写真4 1号土坑（北西より）



写真5 2号土坑（南より）



写真6 3号土坑（北より）

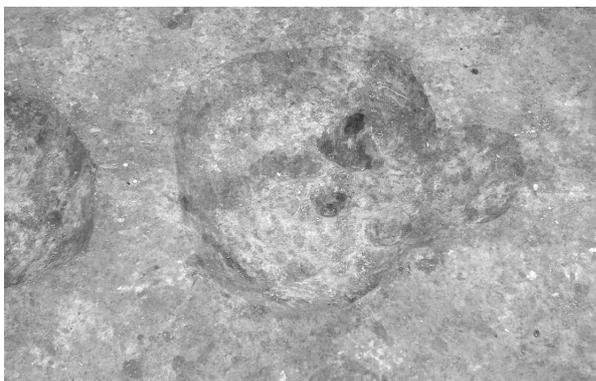


写真7 4号土坑（西より）



写真8 5号土坑（北より）



写真9 6号土坑 (南より)



写真10 7号土坑 (北より)



写真11 8号土坑 (南東より)



写真12 9号土坑 (西より)



写真13 10号土坑 (南西より)



写真14 11号土坑 (西より)



写真15 12号土坑 (西より)

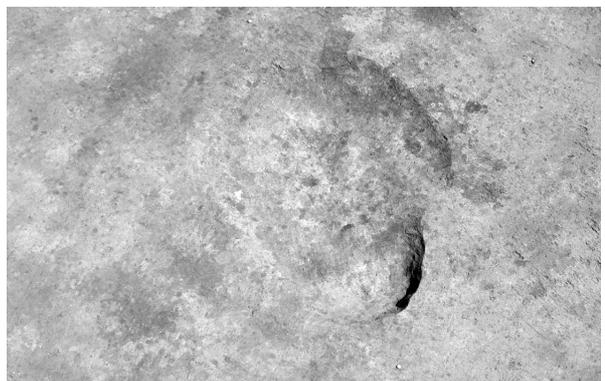


写真16 1号炉穴 (北西より)



写真17 2号炉穴（北西より）

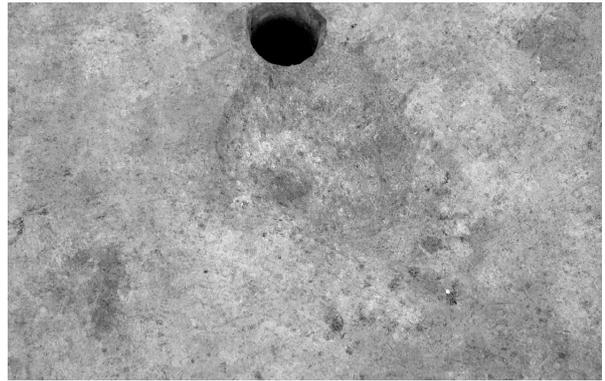


写真18 3号炉穴（南より）

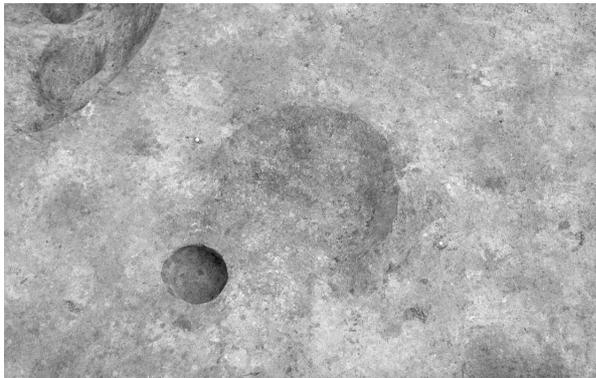


写真19 4号炉穴（南より）



写真20 5号炉穴（西より）



写真21 6号炉穴（北西より）



写真22 北側調査区調査終了後風景（西より）



写真23 調査終了後全景（北より）



写真24 調査終了後全景（南西より）



写真25 羽沢大丸遺跡遠景（北より）



写真26 調査前風景（東より）



写真27 表土除去作業風景



写真28 1号土坑（北より）



写真29 2号土坑（東より）

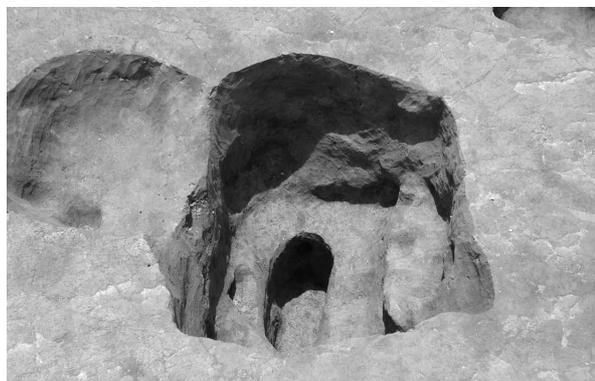


写真30 3号土坑（南より）



写真31 調査終了後全景（西より）



写真32 調査終了後全景（東より）

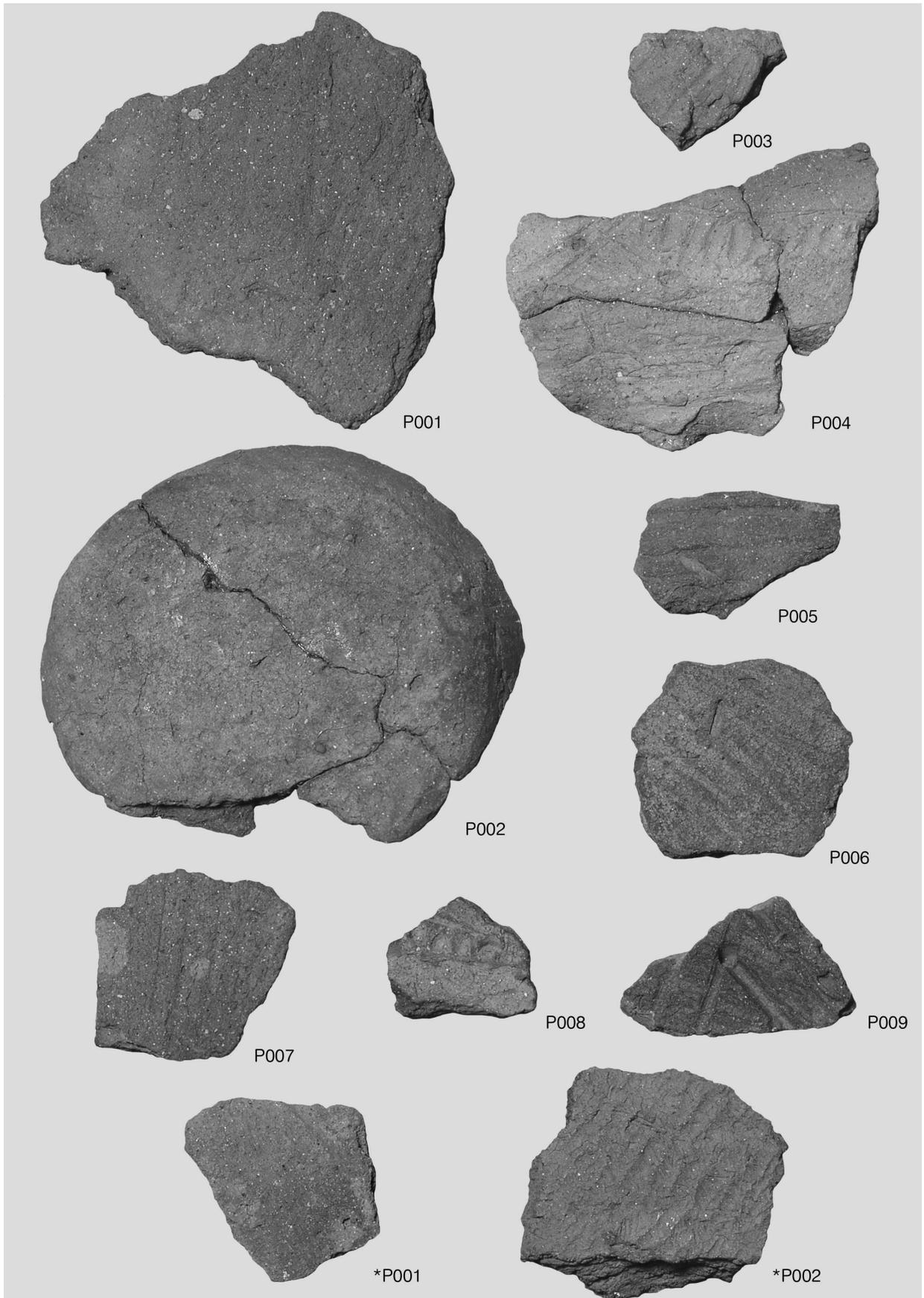


写真33 出土遺物（*は羽沢大丸遺跡出土遺物）

抄 録

ふりがな	はざわぐぎょういせき・はざわおおまるいせきはつくつちょうさほうこく		
書名	羽沢具行遺跡・羽沢大丸遺跡発掘調査報告		
副書名	都市計画道路羽沢池辺線（羽沢・菅田地区）街路整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	鹿島 保宏・橋本 昌幸		
編集機関	財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター		
所在地	横浜市都筑区勝田町760		
発行年月日	2008年1月31日		
ふりがな	はざわぐぎょういせき	ふりがな	よこはましかながわくはざわちょう
所収遺跡名	羽沢具行遺跡	所在地	横浜市神奈川区羽沢町658
市町村コード	141020	遺跡番号	神奈川区No.22
北緯	35° 28' 47"	東経	139° 34' 57"
調査期間	2007年5月14日～2007年6月7日	調査面積	1,791m ²
ふりがな	はざわおおまるいせき	ふりがな	よこはましかながわくはざわちょう
所収遺跡名	羽沢大丸遺跡	所在地	横浜市神奈川区羽沢町365
市町村コード	141020	遺跡番号	神奈川区No.24
北緯	35° 28' 44"	東経	139° 35' 00"
調査期間	2007年5月14日～2007年6月7日	調査面積	816m ²
調査原因	街路整備事業		
所収遺跡名	羽沢具行遺跡		
種別	狩猟場	主な時代	縄文時代早期
主な遺構	土坑12基 炉穴6基 ピット群（倒木跡を含む）	主な遺物	縄文時代早期土器片
特記事項			
所収遺跡名	羽沢大丸遺跡		
種別	狩猟場	主な時代	縄文時代早期
主な遺構	土坑3基	主な遺物	縄文時代早期土器
特記事項			

羽沢具行遺跡・羽沢大丸遺跡発掘調査報告

—都市計画道路羽沢池辺線（羽沢・菅田地区）街路整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書—

編集 / 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター
〒224-0034 横浜市都筑区勝田町760 TEL.045-593-2406

発行 / 横浜市道路局建設部建設課

発行日 / 平成20年1月31日

印刷所 / 株式会社ナデック
